

本庄市遺跡調査会報告 第4集

埼玉県本庄市

# 将監塚遺跡 B 地点発掘調査報告書

本庄市遺跡調査会

本庄市遺跡調査会報告 第4集

埼玉県本庄市

将監塚遺跡B地点発掘調査報告書

本庄市遺跡調査会



## はじめに

平成二年度に、財団法人埼玉総合研究機構の実施した「本庄市における文化、芸術行政に関する調査研究」の報告書では、本庄市は「上信越地域からの玄関口」ととらえています。事実、古来からの文化・情報は西高東低を示しており、西の文化は東海道・東山道を東上してきたといっても過言ではなく、必然的に東山道を伝播した文化は本庄が所在する埼玉県北部を経て東へ向かったと言えましょう。本庄市史編集の監修者として、御指導を賜っている埼玉大学名誉教授小野文雄先生は「こだま」は古代において「小さな政治の中心を示す呼称」であろうと考えておられます。

考古学的な見地からも、長年の成果として、東海地方・大和地方・そして甲斐地方の特徴をもつ土器も発見されていると聞いております。

本庄市教育行政重点施策でも、芸術文化の振興と文化財保護活用の推進を掲げ、あたたかな心をもった人々が形成する「文化的な都市」をイメージした将来像を念頭に、充実させていきたいと願っています。

今回、エステー化学株式会社の委託により当遺跡調査会の事業として実施した将監塚遺跡の成果は、広く活用できるよう、市民に還元することが、今後の与えられた課題として捉えたいと思います。

最後に、調査担当の労をとられた柳田敏司先生、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の皆様、エステー化学株式会社の皆様に、深く感謝の意を捧げます。

本庄市遺跡調査会

会 長 塩 原 暁

## 例 言

- 1 本報告書は、エステー化学株式会社の委託を受けて、本庄市遺跡調査会が調査主体となり平成4年度に実施した工場敷地拡張に伴う発掘調査報告書である。
- 2 本報告書は児玉工業団地造成に伴う発掘調査による将監塚遺跡と同一遺跡にあたるため、将監塚遺跡B地点とした。
- 3 試掘調査は佐藤好司が、発掘調査は柳田敏司、長谷川勇、増田一裕が担当したが、主として長谷川が現地の指揮を取り、発掘調査の後半では太田博之の助力を受けて実施した。調査組織は別掲のとおりである。
- 4 発掘調査は、試掘調査の所見を受けて、重機（0.7ユンボ）を導入して遺構を確認しつつ表土の排除を行った。排土の置き場が調査区域外に求められなかったため、調査区を二分して実施した。
- 5 実測は昭和測量工業株式会社に委託して取り付けた座標を基準に、セオドライト（測機舎TM20D）を使用して10mごとに打杭し、杭間に1mグリット（五寸釘使用）を設定し行った。標高も昭和測量工業の設定したベンチマークからレベル（測機舎B2）を使用して測定した。
- 6 発掘調査時・遺物の写真撮影は長谷川・太田が撮影した。
- 7 本書の執筆は主として長谷川が行い編集した。但し遺構のトレースは増田、遺物の観察表は関根が担当し、それぞれ柳田が監修した。
- 8 本書に掲載した遺構実測図、写真、出土遺物は本庄市埋蔵文化財センターに保管している。本書刊行後に、出土遺物の観察を希望する者は市教委に連絡をとりたい。
- 9 遺物の観察表は、法量、胎土、成形、整形、形態、色調、使用痕、出土状況、接合関係、備考の順に、それぞれ頭文字で表した。個々の項目及び用語については『社具路遺跡発掘調査報告書』に準拠している。
- 10 発掘調査、整理及び報告書作成の組織は次の通りである。

平成4年度（発掘調査）・平成5年度（整理）

主体者 本庄市遺跡調査会

会 長	塩原 暁	（本庄市教育委員会教育長）
会長代理	金井善一	（本庄市教育委員会事務局長）
理 事	柳田敏司	（埼玉県県民部県史編さん室参与）
	後藤秀雄	（本庄市文化財保護審議委員）
	石橋桂一	（熊谷市立女子高等学校教諭）
	坂上英夫	（社会教育課長）
	門倉正峯	（本庄市総務部企画課長 4年度）
	五十嵐信弘	（ 同 同 5年度）
	川端勝治	（本庄市都市整備部都市計画課長）
	新井克易	（本庄市都市整備部区画整理課長）

渡辺道夫 (本庄市経済環境部農村総合整備課長)

監 事 岡 芹 巖 (本庄市行政委員会事務局長)

黒沢雅志 (本庄市会計課長 4年度)

門倉正峯 ( 同 同 5年度)

幹 事 吉田敬一 (社会教育課課長補佐)

長谷川勇 (社会教育課文化財保護係長)

増田一裕 ( 同 主任)

事務局長 坂上英夫

事 務 員 遠藤優子 (社会教育課文化財保護係)

本庄市遺跡調査会調査団

担 当 者	柳田 敏司	長谷川 勇	増田 一裕			
作業従事	堀田 依包	福島 清治	根岸 右作	山田 高次	岡芹 恒夫	
	須藤 義雄	斎藤 仙次	久保 茂	古指 茂	笠本 作治	
	増田由美子	関根 典子	久保田かづ子	滝沢美知子	日向みどり	
	我妻きよみ	金井トシミ	岩崎 マサ	木村かね子	大野 愛子	
	関根 弘子	宮崎千恵子				

11 発掘調査と整理作業に対して次の方々から御指導を賜り感謝申し上げます。(敬称略・順不同)

埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課

外尾常人	小野英彦	丸山 修	三上元一	鈴木徳雄	梅沢太久夫
栗原文蔵	塩野 博	早川智明	森田 栄	藤井 陸	五十幡友良
岩本克昌	野本 仁	小川良祐	横川好富	福島興巖	柴崎起三雄
岡本幸男	石橋桂一	田村 誠	井上尚明	平田重之	後藤 秀雄
塩原恭平	中島利治	吉川国男	吉田哲夫	田尾誠敏	

12 今回の調査で出土した甲斐型模倣坏については田尾誠敏氏より玉稿を賜った。厚く御礼申し上げます。

# 目 次

はじめに

例 言

目 次

## I 発掘調査の契機と経過

- 1 発掘調査に至る経過…………… 1
- 2 調査と整理の経過…………… 2
- 3 調査の方法…………… 3

## II 遺跡をとりまく環境

- 1 試掘調査の概要…………… 5
- 2 遺跡の環境…………… 5

## III 将監塚遺跡B地点の調査

- 1 遺構と遺物…………… 7
  - 1) 住居址…………… 7
  - 2) 住居址以外の遺構…………… 11
  - 3) 出土遺物…………… 13
  - 4) 図版…………… 28
- 2 まとめ…………… 35
- 3 住居址出土の甲斐型模倣坏をめぐって…………… 36
- 4 写真図版

# I 発掘調査の契機と経過

## 1 発掘調査に至る経過

埼玉県北西部に所在する本庄市は、地方拠点都市をめざして種々の方策が検討・実行されつつある。この内、主要工業地帯は市街地の西方に展開しており、大字共栄地区には児玉工業団地が立地する。その北側に所在するエステー化学株式会社より、工場施設の拡大に伴う開発行為のため、埋蔵文化財に対する協議書が本庄市教育委員会に提出されたのは平成元年10月9日であった。

協議の対象地は、大字共栄字北共和181番地の約1,900㎡で、明らかに周知の遺跡内(53-107)に位置していた。このため、平成元年10月11日付け本教社発第320号で、文化財保護法にかかる回答文書を事業者へ送付した。その後、事業実施の方向で協議が進展したため、平成2年5月21日にエステー化学株式会社総務部長並びに常勤監査役と文化財保護係の間で、発掘調査による保存方法と諸手続きを調整した。その結果、まず試掘調査を実施し、当該事業予定地内における埋蔵文化財の範囲、規模、性格、時期等の把握が必要であることを強調した。

これに対して、事業者側より文化財保護の重要性を多分にご理解していただき、平成元年11月2日に試掘調査を実施する運びとなった。試掘調査により判明した遺構は縄文時代の住居址2軒、土壇6カ所であった。ただし、その後事業者側の計画変更により、当該地の開発は実施されず、現状保存されることになりそのまま現在に至っている。

ところが、工場用地の拡大と倉庫建設がふたたび計画され、平成2年7月17日付けで『埋蔵文化財の取扱いについて』の協議書がふたたび市教育委員会に提出されるに至った。当該地は前回の西側一帯にあたる字北共和183,184,202,205番地の約5,900㎡である。すなわち、本報告の箇所にあたる。

これを受けて早速市教育委員会では平成2年10月15日付け本教社発第267号で回答文書を送付した。周辺は試掘調査が実施されており、隣接地においても周知の遺跡内にあたることは明白であったが、極力現状保存を行うことと、保存にかかる積算根拠を得るため、日程調整の後に平成3年6月18日から7月11日にかけて試掘調査を実施し、遺構は住居址、溝、土壇等が確認された。

発掘調査にあたっては本庄市遺跡調査会を発足させ、平成3年10月1日付けで本庄市遺跡調査会長とエステー化学株式会社代表取締役との間で『将監塚遺跡B地点保存事業委託契約書』の締結をした。

件名	発送年月日	発信者
『埋蔵文化財発掘調査の届出について』 第57条の1項の規定	本遺会発第1号 平成4年3月25日	本庄市遺跡調査会 会長 塩原 暁
『埋蔵文化財発掘の届出について』 第57条の2第1項の規定	平成4年3月25日	エステー化学株式会社 代表取締役 鈴木明雄
『埋蔵文化財の発掘について(通知)』	委保第5の572号 平成4年6月5日	文化庁長官
『文化財保護法第57条第1項の規定に基	教文第5-9号	埼玉県教育委員会教育長



## 2 調査と整理の経過

平成4年4月7日～21日

調査の準備は、エステー化学株式会社埼玉工場の建物の一部を借用することができたので、最低限の器材の搬入のみで調査にかかる。2日かけて抜根と試掘トレンチの埋め戻しを行い、9日から重機による調査区域東方からの表土剥ぎ作業を行う。表土剥ぎ作業に平行して松根掘りや児玉飛行場当時及びその後の開拓、耕作等による近現代の土壌が多く、これらについて順次検出する。

4月22日～5月21日

調査範囲の一期分としてその70%について調査を開始する。確認できる遺構は縄文時代住居址2、奈良・平安時代住居址11～12、溝2、児玉飛行場時代の排水溝3、近現代土壌多数であった。

順次東方から遺構の検出を開始、セクションベルトの実測等行う。排水溝は、戦後ヒューム管の抜き取りが行われている。検出作業の進捗にともない、住居址と考えられた遺構は近世の土壌状となるものもあった。

5月22日～6月24日

測量会社による座標・水準点取り付けの基準杭の設定により、実測用基準杭を10mピッチに延長打杭、さらに杭間に1mピッチの五寸釘落しを行い実測準備にかかる。5月末から順次平面図実測にかかる。全区域の全遺構を20分の1に統一して実測作業を行う。実測要員6名、各3名の二班体制をとる。実測の終了した遺構から、順次撮影、遺物の取り上げ、カマドの点検、補足実測等、そして各遺構の最終的撮影は、重機（バックホー）のバケット上に乗し、遺構内を移動して行った。

6月25日～7月4日

重機による残土の移動と二期分の表土剥ぎを行う。試掘調査の結果と一期分の調査状況から二期分とした区域では遺構が存在する部分と、大溝の位置確認のための幅を大きくしたトレンチ的な調査に止めることにする。したがって二期分区域の調査は南側3分の1と北側のトレンチ状及びその中間のトレンチ状の区域で、二期分全体の2分の1の面積に対して行っている。残土の移動・表土剥ぎに平行して遺構の検出も行う。

7月5日～17日

二期分の遺構の検出と実測にはいる。新たに検出された住居址4・大溝・土壌等であったが調査作業を終了し器材等の撤去、埋め戻しを指示、現地作業を終了した

7月17日以後

出土遺物の水洗・註記・復原等の整理作業に着手、他の発掘調査や整理作業の進捗状況に左右されながら、註記作業は（7月～5年2月）専従として1名配置、復原作業については平成5年3月から5月にかけて11名で対応した。

### 3 調査の方法

発掘調査に至る経過の項で述べた通り、エステー化学工業株式会社との協議の中で、本庄市遺跡調査会が発掘作業を実施することになったが、行政が行う発掘調査について、そして原因者負担という体制のもとに実施される民間の発掘調査について常々、その方策を考えていた。それと共に我々が調査に臨む際の態度と、一般的な調査や整理の現状を考え合わせるとき、はたして通常行われているような体制が良いのであろうかという疑問が残った。本庄市遺跡調査会を発足させるについては、庁内でも様々な意見があった。民間からの調査受託を受けずに長い間にわたって処置できた本庄市では、各地で組織されている遺跡調査会の長所、短所まで、事情が分析できた。調査会の発足及び調査会による発掘調査は「最良の方法ではないが、緊急避難的措置」として位置付けられるという、難産の末に発足した経過があった。

一方、発掘調査の現状を考えたとき、調査員の能力、力量には関係なく、大きな組織の場合には計画的に、経費的に余裕のある対応がなされるが、直接に住民や企業と接して行かねばならない市町村の行政の末端では、次から次へと継続する協議・調査・整理・報告書刊行等の事務や作業を行っている。それらは必ずと言えるほどに、詳細な調査と完全な調査報告書刊行のために、膨大な時間と労力を割いている現状がある。しかし一度、報告書が刊行されると、それら調査資料は収蔵庫に収められて、必要な時に、確実に実見することができない状況下におかれている場合が多い。そして「記録保存」という大義名分による発掘調査にもかかわらず、消滅してしまった遺跡の記録よりも、遺物として残る、保存された遺物に大部分の労力を割いている傾向がある。

現実的な事実として、当初は調査区域に含まれて表土剥ぎまで行っていたにも拘らず、報告書の段階では調査実施区域から外れ、何等のコメントもなく、また遺構が確認されているながら遺構の検出がなされないままに調査が終了している例をいくつも実見している。種々の事由によるものであろうが、そのようなことを我々にはできる状況にない。地元に住居して地元で調査せねばならない我々にとっては、発掘現場の周囲の人々に改めての現場説明会を催すまでもなく遺跡の説明をすること、野菜の値動きや、はてまた嫁探し、婿探しの話にもコミュニケーションをもつことが次の調査への、あるいは通常の文化財行政にとって大事な要素となっている。そんな通常のやり取りが文化財を、そして埋蔵文化財を保護する理解力となって跳ね返ってくると考える。

本庄市では、昭和52年度から現在のような、直営の発掘調査が実施できるようになった。区画整理事業に、圃場整備事業に、官民各種の事業に伴う記録保存措置として多くの調査を実施してきたが確実に市民の間に、発掘調査の重要性が認識されつつある。

かつて、女堀区画整理に伴う発掘調査では、中世の河川跡を調査したことがある。「河川跡」は遺跡であるとの積極的な根拠が考えられなかった当時であった。しかし、その後の中世の研究には重要な位置を占めるようになり、調査の段階で遺構の取捨選別はしない方針を考えた。そして御手長山古墳の調査では石室の掘り方まで調査の対象として、古墳築造の過程を徹底的に追及した。

より良い成果を求めて試行錯誤を繰り返し、パターン化しない方法を考え、その時々条件により調査の方法について自問自責してきた。古墳時代の住居址のカマドの構築土の篩かけによって、煙り

出しが住居址外に延びる段階までの時期には、必ずと言えるほど滑石製白玉が含まれることを突き止めている。また、国家座標による測量図の作成は、市町村段階では最も早くから取組み、古墳址の周堀の調査には10cmコンタの実測図をいち早く取り入れている。細かな部分についてまで触れるつもりはないが、絶えず試行錯誤の連続で、良好な成果の得られるものについては、現在でも継続し、その遺跡にたいして有効な方法を考え、実行している。

さらに平成元年度から始まった「小島西区画整理事業」の47ヘクタールに及ぶ発掘調査では、遺構実測図をコンピューター化する方法をとっている。実測図の縮尺は機械的に自由自在、三次元の作図も可能で、人力を遙かに越えた有効な成果が得られている。

発掘調査についてもセクションベルトを残しながら、有効な堆積状況が見られない場合は実測を行わないこと、労力（作業員）の有効な使い方、また調査に伴う事務の改善等々。それらの試行錯誤の一環として調査を実施するについての対応策としての普段からの考え方を、以下に示しておきたい。

「記録保存」とは、破損の前に「記録で保存すること」が前提であって、言い換えれば「保存できるものは記録する必要のないもの」と考えることができまいか。勿論遺跡は消滅する。遺跡と遺物との関係も消滅するが、遺物は確実に残される。しかし残された遺物は現地調査終了後に、おおまかな流れだけでも水洗い・註記・復原・実測・トレース・版組という工程で調査報告書に掲載されている。一方、膨大な労力を費やした土器実測図も「あれでは使えぬ」、「観察不足」等々様々な批評を受け、しかもそれらが観察や実測の方法の変化によって「5年は使えぬ」等の状況下にあるのではないか。

いつも調査に臨むにあたり「この方法で良いのであろうか」との自問自責を繰り返していたとき、消滅してしまう遺跡の調査に時間と労力を注ぎ、残る遺物については、極力労力を省くことを前提とした調査も、時によっては必要ではないかと考えるようになっていった。近年の印刷技術の進歩は、ヘラケズリの砂の移動の方向までも表現し得る程になっている。現地調査から整理・報告書の刊行に至る労力のうち遺物の実測にかかわる部分が以外と多く、経費も膨大となる。復原作業までを整理作業として、あとは実測図でなく、写真と観察表による遺物の概要説明として対応しても良いのではないか。但し、この方法は実見したい研究者には即座に提示できる体制を必要としているが。

こうした考え方のもと、経費の積算・調査体制を整える段階から予め、前記のような方法で取り組むべく予定して調査に取り組んだものである。遺物の実測に金を掛けずに「消滅してしまう遺跡にかける」という大上段に振り翳した割には調査内容に不備が認められ、批判を受けるようなことがあるかも知れないが、経費を少なくするための努力と共に、一方途としての試みとしたい。

## II 遺跡をとりまく環境

### 1 試掘調査の概要

試掘調査はエステー化学株式会社の依頼を受け平成3年6月18日～7月11日にかけて実施し、重機(0.4型ユンボ)については事業者より提供を受け、賃金は国庫補助金を充当して行った。調査地内は以前には果樹園として利用されており、ほぼ全域に樹木が生い茂っている状況であったが、伐採は重機が最低限稼働できる程度にとどめ、結果として、トレンチの設定は樹木の間をぬうように設定し、また一部トレンチは途中で分断せざるを得なかった。トレンチは敷地にそって東西に7本設定、北側より試掘調査を行ったが、その結果によれば遺構確認面である関東ローム層は、西側に向かうにつれ傾斜する傾向をみせ、西側の低い部分には厚さ10cm程の黒色土の堆積が認められ土師器の包含層が形成されていた。このあたりはかつて水流が認められたこともあり包含層の成因はこれによるものと考えられ、この部分には将監塚遺跡の西側で調査された大溝の延長部分が確認された。大溝は当初、西側の道路下に存在すると推定していたがやや東に振れることが判明した。トレンチによって確認された遺構は、調査区の東側に縄文時代の住居址および土壇が、中央部から西側にかけて古代の住居址と思われる遺構が確認され、他に近世と思われる溝や土壇群、また旧日本陸軍の児玉飛行場にかかわる暗渠も確認することができた。このように、当初の予想通り調査区全域にわたって遺構の存在が確認され、将監塚遺跡に接することから同遺跡の範囲内に含まれるものと推定された。

### 2 遺跡の環境

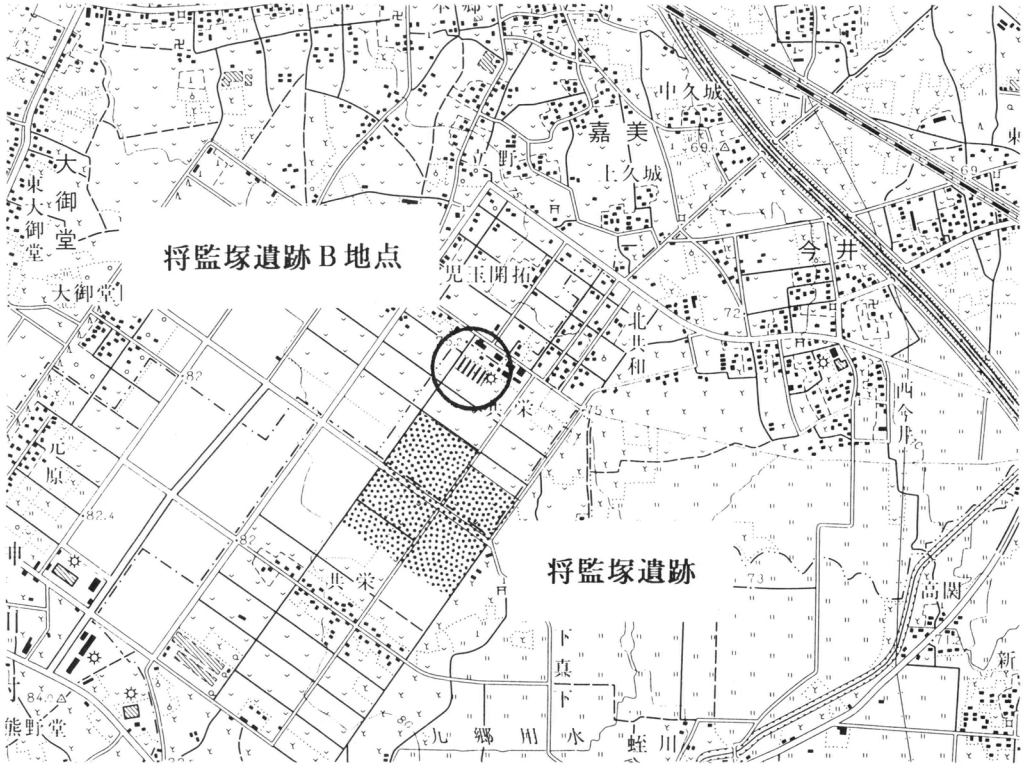
将監塚・古井戸遺跡周辺の遺跡については既に多くの文献で触れられており、ここではそれを繰り返さない。しかし、今回の調査成果を理解するために、将監塚・古井戸遺跡の概要について簡単に理解しておくことにする。

将監塚・古井戸遺跡は児玉工業団地造成に伴い調査されたが、縄文時代中期の集落と律令期の集落がその中心となり、縄文時代の集落は勝坂末～加曾利E式期の大規模双環状集落である。縄文時代の遺構については筆者の力量の及ぶところではないが、本遺跡の東側の児玉町新宮遺跡においても新たな環状集落が発見されており、この周辺が、該期の拠点的な集落であったと推定される。

律令期の集落は101棟の掘立柱建物、186軒の竪穴式住居址、井戸10基、大溝1条、土壇などが検出されている。大溝は集落の西側に存在するか、この大溝の掘削がこの集落の成立に深く関与していることが伺え、計画的に形成された集落であるとの指摘もある。この集落のなかで特筆すべきは第4号住居址と呼称された一群で、庇付掘立柱建物や倉庫と考えられる総柱建物、井戸を含むコ字形配置の建物群である。この建物群は極めて規格性をもって配置されており、これをもって、報告者は将監塚・古井戸遺跡の性格を「郷家を含む集落」としている。

このように古墳時代までは自然堤防上を除くと集落の形成がなされなかった本庄台地奥部にも、律

令期には将監塚・古井戸遺跡、皂樹原・松下遺跡のように大規模で、一般的な集落とは趣を異した集落が形成されるようになる。このような新たな集落の編制や、立地の選択にあたっては条里の施工なども密接に関係しているのであろう。



将監塚遺跡 B 地点位置図



### III 将監塚B遺跡の調査

#### 1 遺構と遺物

##### 1) 住居址

##### 1号住居址

調査区の東方に検出された縄文時代の住居址で、直径5mの円形で表土から30cmほどで40cmの壁高が確認できるが調査区域全体が西方に傾斜しているため西方の壁高は、床面が多少あがり気味であり20cm程度ある。壁に沿って壁溝が回るが、西部分では3条、東北部分では2条、南東部分では1条が、東部分で円が接するような状態で検出されている。壁溝は20~30cmと一定でなく、内側の溝は北から西にかけて、4分の1周程度であるが10~20cmの幅をもっている。南東を除いて回る中間の溝も10~20cmの幅である。中央から南東よりに長径1m、短径80cm、深さ40cmの土壌が確認され、覆土に土器が含まれている。内側の溝にかかる土壌は50×60cm、他に南西に2つの土壌がある。遺物は内側の溝の範囲内に多く存在している。遺物の取り上げ作業後、中央北寄りに45×50cm、深さ10cmの土壌が確認された。出土遺物には多数の縄文式土器の他に黒曜石製の石鏃が検出されている。

##### 2号住居址

1号住居址の北、約5mに位置、当初、住居址としての認識はなく、中央部に縄文式土器が確認されていたので精査したものである。土器周辺は黒色土が確認できたが、ソフトロームを除いた結果住居址状のプランとなったために住居址として扱ったが疑問が残る。壁高は15cm程度であるが、壁溝や焼土も確認できず直径20~30cm前後の住居址周辺には見られないピットが確認されることから取り敢えず住居址とした。長径4.1、短径4.4mのいびつな円形である。

##### 3号住居址

調査区中央の北寄りに検出された住居址で2.9×3.4mの規模であるが、表土から確認面までが浅く、樹木の根などにより確認面からのプラン確認に苦慮、中央部分から床面を追って検出したものである。ほぼ東西南北にコーナーが位置、西コーナーは近代の土壌によって切られ、南コーナーは不明瞭である。壁高は東北壁で約27cm、南西壁で17cm。カマドは東北壁の南寄りに位置しているが、袖状の遺構は確認に至らず、焼土と土器片の検出によりカマドと確認できたものである。壁溝、貯蔵穴、柱穴とみられる遺構は確認できなかった。出土遺物としては甕・台付甕・坏などがある。また、北コーナーに寄って検出された坏は甲斐型を模倣した坏である。

##### 4号住居址

3号住居址の西約5mに位置し、平面は東西3.2m、南北2.8mの長方形である。ほぼ東西南北に壁

があるが、東壁で33cm、西壁で45cmと残存状況は3号住居址に比較して良好であった。南西コーナーは近代の深さ18cmの浅い土壌に切られているが、壁高があるためコーナー底部までは破損していない。中央部にも1.1×1.4mの近代土壌が床面を切っている。カマドは東壁南寄りに位置し壁部分での上幅は60cm、確認できる煙出先端部までは壁から1mある。カマドの掘方の両袖部分には壁に半分埋め込まれた甕が確認できることからこれを袖としていたと考えられる。平面形の広い部分が火床、狭い部分が煙道であろう。壁溝は東壁を除き深さ4～5cm、幅10cm前後で三方に巡っている。柱穴はほぼ四角形となる位置に4つ認められるが住居址各コーナーの対角線上からは大きく外れている。これらは直径20～24cm、深さは最も浅い東北のピットで18cm、深い北西のピットで34cmあり柱穴とみて間違いないものであろう。貯蔵穴とみられる遺構は確認できない。出土遺物としてはカマドの袖の芯として利用された2個体の甕のほか、甕・台付甕・坏などがあるが、スラグや85土壌と接合する縄文式土器がある。但し、この縄文式土器は住居址内ではあっても非常に浅い位置からの出土である。なおこの住居址の北西柱穴に接して銅製の鈴が検出されている。

## 6号住居址

調査区南端に位置し、東部分のみの検出で概ね4分の3程度を調査したにすぎないものである。平面形は東壁が2.3m、確認された範囲の南壁が2.1m、北壁が3.4mほどの長方形である。壁高は南コーナー付近で41cm、調査部分西端では31cmである。カマドは東壁に確認できるが、堅い焼土面を残して、覆土を排除すると三角状の掘形となるが、遺構というよりカマドの痕跡と言える。土器の検出も認められず、検出されたカマド最深部でも4cm程の壁高が残存している。壁溝、貯蔵穴、柱穴等は確認できない。北コーナー内側に0.9×1.2m、床面からの深さ45cmの土壌が切っている。出土遺物には甕・坏などがあるが、坏にはほぼ完形の1点がある程度の残存状態の悪いものである。

## 7号住居址

6号住居址の北約5mに位置し、同住居址と軸をほぼ同じくする。東北コーナー・北壁に攪乱があるが、東西4m、南北2.8mの長方形である。カマドは東壁に認められるが、6号住居址と同様に上端が三角形、底部は四角形に掘形がみられるのみであり、覆土は黒色土のみで微量の焼土が混じる程度で、カマドの痕跡である。壁高は東コーナー付近で31cm、西コーナー付近で25cmで、壁溝は見られない。柱穴は各コーナーに接して4か所に認められ直径26～32cm、深さは11～19cmでほぼ各コーナーの対角線上に乗っている。貯蔵穴は認められないが、北壁と西北の柱穴の間に平面形が不整三角形、高さ7cmほどの壇状となっている部分がある。遺物の検出は非常に少ない。

## 8号住居址

7号住居址の西北3mに位置し、東西南北に壁が存在する。北壁及び南壁は共に4.7m、東壁で3.4m、西壁で3.3mと若干台形を示している。カマドは東壁の南寄りに位置するが、焼土や炭化材は認められるものの、火床や壁を構成せずカマドとしての残存状態は非常に悪い。実測図では袖状の遺構や火床が表現されているが、軟らかな覆土を排除した段階で実測したもので、袖の高さは向かって右側

は20cm、左側は9cm程度を計るのみである。柱穴は確認できなかったが壁溝は北壁から東壁のカマドまでの部分、南壁の一部のみに確認できる。幅は10～20cm、深さは東北コーナー付近で11cm、北壁中央付近で6cm程度である。壁の高さは南東コーナーで35cm、南西コーナーで12cmであるが、これは発掘区の西端に所在する大溝に向かって地山がなだらかに傾斜していることによる。貯蔵穴は確認できない。なお、西側に接する9号住居址とは接しているものの、切り合い関係にないが、西壁南寄りの掘り残された部分は、9号住居址のカマド部分にあたり実測図作成上の都合によるもので本住居址の遺構ではない。遺物は南壁寄りに多く検出されている。甕には残存状態の良いものはないが、15個体の坏は完形または、ほぼ完形の個体が多く、甲斐型に類似するものが含まれている。土師器質の蓋も須恵器の形態と大きく外れており、特異な例である。また土製の紡錘車がカマド左袖外側、鉄製鎌は住居址中央付近から検出されている。

## 9号住居址

8号住居址に接しているが切り合い関係はなく、カマドの状況から8号住居址の廃絶埋没後に築造されたことが明確となる。主軸は8号、10号住居址とほぼ同一であり、10号住居址と南西コーナー部分が重複している。東壁は3.5mあるが、北西コーナー付近は礫を多く含む地山と覆土のため検出が明瞭ではなく、不安は残るが北壁は4.8mで長方形の平面形態をもつ。カマドは東壁南寄りにあるが、三角形の掘形が残るのみで、若干の焼土と覆土の硬軟の状況をみながら検出したものである。柱穴、壁溝は検出できず、壁高は南壁で36cm、北東コーナーで29cm、北西コーナーでは48cm程あるが、これは礫混じりの判りにくい地山と覆土、そして遺物が認められないことなど、掘り過ぎている可能性がある。貯蔵穴らしい遺構も確認できない。住居址内部に不整形の土壌が確認できる。出土遺物は甕・坏・蓋・刀子と考えられる鉄片などがあるが、総じて残存状況は悪い。

## 10号住居址

北東コーナーで9号住居址と重複関係にあり、さらに南西の一部は発掘調査区域外にある。この住居址付近では地山、覆土ともに粘質をもち検出しにくい遺構であった。調査の都合により二回にわけて調査を行なった。東西南北に壁をもち、北壁で4.9m、東壁で4.4mを計り、ほぼ正方形に近い。確認面からの平面プランがつかみにくく、8～10号ともセクションベルトを頼りに遺構検出を行ったため、結果とし東壁の一部、掘り過ぎの恐れがある。カマドは東壁南寄りに位置し、半楕円の掘形と、焼土と若干の土器片からカマドの位置と推定できる程度である。柱穴、壁溝、貯蔵穴等は確認できない。壁高は南東コーナーで40cm、北壁中央部で42cm、北西コーナーで51cmあるが、調査区西端の大溝に近付いたためにかえって地山高が増していることによるもので、床面レベルに大きな差はない。不整形の土壌が4か所に認められる。出土遺物は今回調査の範囲で最も多く、観察表に掲げることのできたもののみで33個体を数える。器種は甕・台付甕・坏・蓋などが見られ、坏は25個体あるものの完形に近いものは2個体にすぎない。このほかに用途不明の鉄製品2点が検出されている。



## 11号住居址

8・9号住居址の北60cmに位置し、各コーナーを東西南北にもつ。北東壁は2m、南西壁が2.2m、長辺が2.9mの僅か台形状となる。カマドは北東壁に位置し、焼土を手掛かりとして軟らかい覆土を排除して検出したものである。袖状の遺構は確認できなかった。壁溝は北西壁と南西壁の一部に確認され、幅20cm、深さは5～13cmと一定しない。柱穴、貯蔵穴等は確認できない。残存する壁の高さは29～40cmであるが、これは床面が東側で深く、西側で浅いことによる。出土遺物には甕・坏などがあるが甕の残存は悪く、坏の4点は完形に近い残りである。

## 12号住居址

10号住居址に接し、南は調査区域外、西側は大きく深い攪乱によって東コーナーのみが検出された住居址である。南東壁は1.3m、北東壁は2.5mの範囲3平方m程度の検出であった。カマドは北東壁に見られ、袖状の遺構は確認できず、焼土と土器片の検出によって実測図のような形状となった。柱穴、壁溝はみられず、径、深さとも40cmのピットが貯蔵穴にあたるものであろうか。

## 13号住居址

12号住居址の北に、攪乱の大穴をはさんで所在するが、この攪乱によって南コーナーが破損している。東壁は2.6m、北壁は3.1mを計る長方形であろう。カマドは東壁の南寄りにあり、袖状に住居内部に延びるが残存は明瞭ではない。柱穴、壁溝、貯蔵穴等は見られないが、遺物の検出は比較的多い。壁高は床面がほぼ一定であるにもかかわらず、南東コーナーで27cm、北東コーナーで20cm、南西コーナーで26cmである。

## 14号住居址

調査区の北西に位置し、15号住居址とほぼ軸を同一にして所在する。この住居址も確認面が浅く、しかも近代の土壌による攪乱が著しい。東西南北に各コーナーがあり、東コーナーは土壌によって破損している。北西壁は3.7m、南西壁は3.1mであり長方形となるものであろう。カマドは北西壁にあり、焼土と覆土の硬軟によって検出したもので、袖状の遺構は確認できず、残存状態が悪い。柱穴、壁溝、貯蔵穴などは認められず、壁高は各コーナーで20cmから33cmであるが、床面はほぼ一定のため、南コーナーが最も深いのは地山との関係で、確認面が平滑でないことによる。住居址の半分程に近代土壌が存在している。遺物は南東壁に接して検出されている。

## 15号住居址

14号住居址の北に2.2mと接し、軸をほぼ同じにしており、調査区外に半分程かかっていたが拡張して完掘したものである。壁コーナーは東西南北にあり、北西壁は4.3m、南東壁は3.8m、北東壁が3.3m、南西壁は3.2mを計る。カマド、柱穴は確認できず、北東壁は近代の土壌によって切られている。東コーナーに接して40×60cm、深さ9cmの貯蔵穴状の落ち込みがみられる。壁高は東コーナーで33cm、

北コーナーで18cmと一定でなく、これは14号住居址と同様に確認面が平滑でないこと、地表面から確認面までも浅く、樹木の根による影響である。床面は炭化物と焼土に覆われているが、特に炭化材は住居址中央部からほぼ放射状に認められている。遺物取り上げ後に炭化材や焼土を取り除くと大小7か所に土壌と一部に壁溝が確認できる。出土遺物には甕・坏などがあるが、覆土扱いで取り上げた遺物のなかに甲斐型を模倣した坏が見られる。鉄製品も比較的多く、カマド内部から鎌、刀子と考えられる2点、用途不明な鉄製品、そして焼土や炭化材除去後の南コーナーの土壌の比較的上層から鉄斧が確認されている。土錘も1点出土している。

## 2) 住居址以外の遺構

### 0土壌

2号住居址とした遺構の東、1.5mに位置し、土壌番号の付定後に土質の変化が確認され検出し、縄文土器が検出されたために0土壌としたものである。直径90cm、深さ30cmの土壌である。

### 25土壌

1号住居址の北西2mに位置し、直径1.12mの土壌である。深さは10cmで内部から若干の縄文土器片が検出されている。

### 85土壌

1号溝の南端付近の、同溝に切られている土壌である。短径は1.4mの長楕円形になるものと考えられる。深さは22cmで中心部に縄文土器片が集中している。

### 大溝

既に児玉工業団地造成に伴う発掘調査で確認されている大溝であるが、調査区西端にその延長が予測され、試掘調査時点でも確認されていたものである。今回の調査では、発掘調査区西端の外側道路線上に中心があると予測して、この大溝を全掘することよりも方向を確認することに調査の主眼をおいたが、結果として調査区の範囲内で南側では蛇行した状況を示していた。調査区境界にあたる北側では双方の立上がり部分が調査範囲で確認されている。

地表面から確認面までは40cmと浅いが、北側の断面では上幅は4.4m、深さ1.8mを計る。底部に東側に寄った40cmの砂礫層の堆積がみられ、砂礫を多量に含む灰褐色土や黄褐色土の堆積の後に再び40cmの砂礫層を堆積、そして砂粒や砂礫を多量に含む暗褐色土の堆積後、再び20～10cmの砂礫層を堆積して溝の3分の2を埋没させている。やがて粘性の強い暗褐色土や褐色土の堆積によって溝としての機能を失っている。34m程南の断面では、上幅4.6m、深さ1.6mを計るが底部から40cmの砂礫層の堆積、そして多量に砂礫を含む黄褐色土の薄い層の上にさらに砂礫層が堆積し、同様な黄褐色土を挟んで暗褐色土や暗褐色土が西側に堆積し、東側には砂礫層が堆積する状況を示し、溝の3分2を埋没させている。

このことは至近距離にありながら全く異なる堆積状況であり、上幅4.5m前後の溝の中にあっても攻撃面と緩流面が複雑に入り組んでいることを示すものであろう。出土遺物は磨耗した土器の細片が多いが、坏や試掘調査時点で確認面で得られた長頸瓶を掲げておく。

## 1号溝

調査区南端から北西方向にむけて、基本的に直線、小さく蛇行する溝である。上幅は南端で1.3m、下幅40cm、深さ56cmの逆台形を呈している。最も狭い部分でも上幅1m、下幅20cmである。調査区中央西寄りの屈曲する部分での深さは39cmであるが表土及び確認面が西方向へ傾斜しており、溝底は南東から北西へ低くなっている。また、底部には砂や細礫などの堆積は認められなかった。溝内部からは、土器片や近世遺物が検出されているが、ここでは中近世の溝とだけ考えておきたい。

## 2号溝

1号溝に直交するように調査区北の東寄りから南西方向に通ずる溝である。北端で上幅1.1m、狭い部分で50cmの半楕円の断面をもち深さは10cm程度と浅く、1号溝付近で確認できなくなる。底部に細かな砂層が薄く堆積し、北東方向へ流下した痕跡が認められる。時期は不詳である。

## 5号址

表土剥ぎ当初の状況では、調査区中央の一辺が3.4mの正方形の遺構及び西に接する1.9×2.2mの遺構は住居址として扱い、それに近代の土壌が重複しているものと考えられた。検出作業直後から近世の土壌であると確認されたが、深さ15~10cmの壁状の立上がりをもっており、5号址として扱った。住居址状の中央に0.7×1.2m、深さ14cmの長方形土壌が、そしてまたこの南にも0.7×1.7mの長楕円形の土壌が確認されている。長方形の土壌からは内耳土器、火鉢が検出され、長楕円形の土壌からは陶磁器片が多数検出されている。

## 17土壌

調査区の東、1.3×1.4mの土壌であるが、ペーゴマが底から1点検出されているので敢えてここに掲げている。銹化膨脹がみられるが、径3cm、高さ1.8cmである。文字不明。

## 62土壌

5号址とした遺構の南8mに位置し、結果的に住居址状の遺構となったが判然としない。土壌と切り合い関係にあり、覆土はゴミ溜状で遺物の検出状態にも一定の基準がなく散在した状態であった。キセル・銅製の筭状製品、鉄銭状鉄製品などがある。

## 70土壌

1号溝の東で、62土壌の南に散在する10の土壌の中の一つである。4.2×4.5mの円形に近い平面をもち、深さは25cmで、周囲の土壌と同様な深さをもっている。いずれも陶磁器片を検出するが、当土壌は寛永通宝と用途不明な鉄製品を検出している。

## 96土壌

東西及び南北2.1mを計る正方形に、東側に70cmの半円形、北西に40cmの楕円形に張り出した土壌である。東方への張り出し部分と正方形の接する部分の深さが同じであるが、西北への張り出し部分は半分10cm程度であるが、このなかから銭が検出されていることから一体化した遺構と考えられるが、性格は不明である。東張り出し部分や南西寄りに陶磁器片や素焼きの浅鉢などが検出されている。なお、深さは東寄りでは約20cm、西寄りでは若干浅くなる。用途不明な鉄製品や寛永通宝が2点、獣面付きの素焼きの浅鉢などが検出されている。

### 120土壌

5号址とした遺構に接した1.9×2.2mの方形の土壌で円形の土壌との切り合い状況をもつ。深さは14cm前後であるが、壁状の立上りの中位から天保通宝が検出されている。

### 114土壌

1号溝と近代溝の接する、一期分調査区の西端に位置する。直径2m程の不整形の平面をもち、深さ30cmの土壌である。内部から陶磁器や灯明皿が検出されている。

### 近代溝（1号～3号）

調査区内では南南東方向から北北西方向への3条の排水溝が確認されている。溝の中心から中心まで25mを有し、児玉飛行場の滑走路部分の排水用につくられたものである。西方に向かって浅くなるが、比較的残存状況の良好な2号の東方部分では確認面での上幅は75cm、下幅30cm、深さは75cmを計る逆台形を呈する。これら3条の排水溝は小排水路で、これらを集めてさらに大きな排水路に結び、滑走路区域と本部建物群区域の間の「飛行場落し」に流下させ女堀に排水していた。

3条の内、最も南に検出された3号は一期分調査区の西端で東に約20度ほど屈折している。他の1・2号について屈折は確認できなかった。

この排水路は一端掘りあげて底に若干の砂礫を敷いたのちに長さ65cm、直径16.1cm（内径11.8cm）、受け口直径21.8cm（内径17.6cm）のヒューム管を伏せてその後に砂礫や玉石を埋め戻したもので、ヒューム管には相対する位置に二穴づつ、計4か所に直径1cm程度の穴が穿たれている。埋設されたヒューム管の受け口は全て西側に設置され東方に向けて流下するよう設置されたものである。なお、終戦後の物資不足の折りにはこのヒューム管を得るために掘り上げる抜き取りが行われたようで、その部分では確認面での砂礫は確認できなかった。

## 3) 出土遺物

### 将監塚遺跡B地点1号住居址出土遺物（Y…擦糸・R…隆帯・T…沈線・J…縄文）

器種	番号	法量(cm)	特 徴
深鉢	1	口径 331.0	胎・白色粒子 石英 褐鉄粒 砂粒 焼・普 色・褐色 残・上半 文様・Y—R—T
深鉢	2	口径 20.5	胎・白色粒子 石英 砂粒 焼・普 色・暗褐色 残・? 文様・J—R—T
深鉢	3		胎・白色粒子 石英 角閃石 砂粒 焼・不良 色・褐色 残・一部 文様・Y—R
深鉢	4		胎・白色粒子 石英 角閃石 砂粒 焼・普 色・褐色 残・胴部一部 口縁部1/3 文様・J—R—T
深鉢	5		胎・白色粒子 石英 砂粒0.1～0.4cm礫 焼・普 色・褐色 残・胴部一部 口縁部1/3 文様・Y—R—T
深鉢	6		胎・白色粒子 石英 砂粒0.1～0.9cm礫 焼・普 色・赤褐色 残・胴

			部及び口縁部一部 文様・Y-T
深鉢	7		胎・白色粒子 石英 砂粒 焼・普 色・赤褐色 残・胴部及び口縁部一部 文様・Y-R-T
深鉢	8		胎・白色粒子 石英 砂粒 焼・普 色・橙褐色 残・1/8 文様・Y-R-T
深鉢	9		胎・白色粒子 砂粒 焼・普 色・褐色 残・胴部一部 口縁部 文様・Y-R-T
深鉢	10		胎・白色粒子 砂粒 焼・普 色・暗褐色 残・胴部及び口縁部一部 文様・J-R-J
深鉢	11	口径 16.1	胎・白色粒子 石英 褐鉄粒 砂粒 焼・普 色・褐色 残・上半 文様・J-R
深鉢	12		胎・白色粒子 石英 砂粒 焼・普 色・褐色 残・下半の2/3 文様・J-R
深鉢	13		胎・白色粒子 砂粒 石英 焼・普 色・外面褐色 内面 黒褐色 残・下半の3/4 文様・Y
深鉢	14		胎・褐鉄粒 白色粒子 石英 砂粒0.1~0.3cm礫 焼・普 色・外面褐色 内面 黒褐色 残・下半1/2 文様・Y-T
深鉢	15		胎・白色粒子 石英 砂粒 焼・普 色・褐色 残・下半の1/2 文様・R-T
深鉢	16		胎・褐鉄粒 石英 砂粒 焼・良好 色・淡褐色 残・一部 文様・Y-R-T
深鉢	17		胎・白色粒子 褐鉄粒 砂粒 為・良好 色・外面 淡褐色 内面 淡褐色 残・一部 文様・Y-R-T
深鉢	18		胎・白色粒子 石英 砂粒 焼・普 色・褐色 残・口縁部1/2 文様・Y-T
深鉢	19		胎・白色粒子 石英 角閃石 褐鉄粒 砂粒 焼・普 色・淡褐色 残・口縁部1/2 文様・R-T
深鉢	20		胎・白色粒子 石英 角閃石 砂粒 焼・普 色・褐褐色 残・一部 文様・R-T
深鉢	21		胎・白色粒子 褐鉄粒 砂粒0.1~0.3cm礫 焼・普 色・外面 赤褐色 内面 黒褐色 残・1/8 文様・R-T
深鉢	22		胎・白色粒子 石英 砂粒 焼・普 色・褐色 残・一部 文様・R-T
深鉢	23		胎・白色粒子 砂粒 焼・普 色・褐色 残・一部 文様・R-T
深鉢	24		胎・白色粒子 褐鉄粒 石英 砂粒 焼・普 色・橙褐色 残・口縁部1/3 文様・R-T

将監月遺跡B地点2号住居址出土遺物

器種	番号	法量(cm)	特 徴
深鉢	1		胎・褐鉄粒 白色粒子 砂粒多 0.1~0.3cm礫多 焼・普 色・白褐色 残・1/6 文様・Y-R-T
深鉢	2		胎・白色粒子 砂粒 焼・普 色・外面 褐色 内面 黒褐色 残・一 部 文様・Y-T
深鉢	3		胎・白色粒子 砂粒 石英 焼・普 色・褐色 残・一部 文様・Y< <sup>T</sup> <sub>R</sub>

将監塚遺跡B地点3号住居址出土遺物

器種	番号	法量(cm)	特 徴
甕	1	口径 20.5 器高 28.1	胎・白色粒子 石英 角閃石 褐鉄粒 成・底部と胴部 頸部接合 整・ 外面 胴部ヘラケズリ 内面 胴部ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 焼・ 普色・橙褐色 使・外面底部及び胴部炭化物付着 残・ほぼ完形
甕	2	口径 19.9 器高 25.9	胎・白色粒子 石英 角閃石 褐鉄粒 成・底部と胴部 頸部接合 整・ 外面 胴部ヘラケズリ 内面 胴部ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 焼・ 普色・橙褐色 使・外面底部及び胴部と内面口縁部炭化物付着 残・底部 胴部 3/4 口縁部
台付 甕	3	口径 13.0	胎・白色粒子 石英 角閃石 褐鉄粒 砂粒 成・脚部と胴部 胴部と 口縁部接合 整・外面 胴部ヘラケズリ 内面 胴部ナデ 脚部及び口 縁部内外面ヨコナデ 焼・普 内面胴部及び口縁部炭素付着 色・赤褐 色 使・外面胴部及び口縁部炭化物付着 残・2/3
台付 甕	4	口径 10.5	胎・白色粒子 石英 褐鉄粒 成・脚部と胴部 胴部と口縁部接合 整・ 外面 胴部ヘラケズリ 内面 胴部ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 焼・ 普色・褐色 使・外面胴部炭化物付着 残・台部欠損
短頸 壺	5	口径(4.9)	胎・白色粒子 角閃石 成・脚部と胴部 胴部と口縁部接合 整・胴部 内外面ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 焼・普 内外面底部炭素付着 色 淡褐色 残・1/2
椀	6	口径(11.4) 器高 7.1	胎・白色粒子 石英 角閃石 褐鉄粒 砂粒 成・底部と胴部 胴部と 口縁部接合 整・外面 底部及び胴部ヘラケズリ 外面 底部及び胴部 ナデ口縁部内外面ヨコナデ 焼・普 色・褐色 残・2/3
坏	7	口径 12.2 器高 2.9	胎・白色粒子 石英 褐鉄粒 角閃石 成・底部と口縁部接合 整・外 面底部ヘラケズリ 内面 底部ナデ 底部指頭圧痕有り 口縁部内外面 ヨコナデ 焼・普 色・褐色 残・完形

坏	8	口径 12.0 器高 3.4	胎・白色粒子 石英 成・底部と口縁部接合 整・外面 底部ヘラケズリ内面 底部同心円状ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 焼・普 外面口縁部一部炭素付着 色・赤褐色 残・ほぼ完形 (口縁部一部欠損)
坏	9	口径 12.2 器高 2.7	胎・白色粒子 石英 成・底部と口縁部接合 整・外面底部ヘラケズリ内面 底部ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 焼・普 外面底部及び口縁部炭素付着 色・赤褐色 残 3/4
坏	10	口径 12.5 器高 3.2	胎・白色粒子 石英 成・底部と口縁部接合 整・外面 底部ヘラケズリ内面 底部ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 焼・普 内面黒色処理 外面口縁部一部炭素付着 色・外面 褐色 内面 黒色 残・底部 4/5 口縁部
坏	11	口径 12.5 器高 3.4	胎・白色粒子 石英 角閃石 褐鉄粒 成・底部と口縁部接合 整・外面底部ヘラケズリ 内面 底部ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 焼・普 外面底部に炭素付着 色・内面 灰褐色 内面 褐色 残・ほぼ完形
坏	12	口径 12.1 器高 3.5	胎・白色粒子 石英 成・底部と口縁部接合 整・外面 底部ヘラケズリ内面 底部同心円状ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 焼・普 色・褐色 残・ほぼ完形
坏	13	口径 12.3 器高 3.1	胎・石英 角閃石 成・底部と口縁部接合 整・外面 底部ヘラケズリ内面 底部ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 焼・普 色・褐色 残・底部口縁部 1/2
坏	14	口径 11.7 器高 3.3	胎・石英 成・底部と口縁部接合 整・外面 底部ヘラケズリ 内面 底部ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 焼・普 外面底部炭素付着 色・灰褐色 残・底部 口縁部 1/2
坏	15	口径 10.6 器高 3.4	胎・褐鉄粒 砂粒 石英 白色粒子 成・底部と口縁部接合 整・外面 底部 手持ちヘラケズリ及びミガキ状ヘラナデ 口縁部 回転ナデ 内面底部 ナデ後暗文 口縁部 回転ナデ後暗文 焼・良好 色・橙褐色 残・ほぼ完形

将監塚遺跡B地点4号住居址出土遺物

器種	番号	法量(cm)	特 徴
甕	1	口径 20.9 器高 27.6	胎・白色粒子 石英 角閃石 褐鉄粒 成・底部と胴部下半 胴部下半と上半 頸部接合 整・外面 胴部ヘラケズリ 内面 胴部ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 焼・普 色・褐色 残・ほぼ完形 出・カマド左袖
甕	2	口径 20.6 器高 26.2	胎・白色粒子 石英 角閃石 褐鉄粒 成・底部と胴部下半 胴部下半と上半 頸部接合 整・外面 胴部ヘラケズリ 内面 胴部ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 焼・普 外面底部及び胴部一部炭素付着 色・褐色

甕	3		残・3/4 出・カマド右袖 胎・白色粒子 石英 角閃石 褐鉄粒 成・胴部下半と上半 頸部接合 整・外面 胴部ヘラケズリ 内面 胴部ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 焼・普 色・褐色 残・1/2
甕	4	底径 3.9	胎・白色粒子 石英 角閃石 褐鉄粒 成・底部と胴部接合 整・外面 胴部ヘラケズリ 内面 胴部ナデ 焼・普 外面底部及び胴部一部炭素 付着 色・褐色 残・底部 胴部一部
台付 甕	5		胎・白色粒子 石英 成・裾部と脚部 脚部と胴部接合 整・裾部と脚 部内外面ヨコナデ 焼・普 色・褐色 残・台部
深鉢	6		胎・白色粒子 石英 成・胴部と口縁部接合 焼・良 色・褐色 接・ 85土壌 残・胴部一部口縁部 3/5
坏	7	口径 13.9 器高 4.9	胎・石英 褐鉄粒 角閃石 成・底部と口縁部接合 整・外面 底部ヘ ラケズリ 内面 底部ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 焼・普 色・淡褐 色 残・底部 口縁部 1/3
坏	8	口径 12.3 器高 3.5	胎・白色粒子 石英 成・底部と口縁部接合 整・外面 底部ヘラケズ リ内面 底部ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 焼・普 色・褐色 使・外 面口縁部炭化物付着 残・完形
坏	9	口径 12.5 器高 3.7	胎・白色粒子 石英 0.1~0.4cm砂礫 整・内外面ロクロミズビキ 屋・普 色・灰色 残・完形

将監塚遺跡B地点6号住居址出土遺物

器種	番号	法量(cm)	特 徴
甕	1	底径 5.3	胎・白色粒子 石英 褐鉄粒 成・底部と胴部接合 整・外面 胴部ヘ ラケズリ 内面 胴部ナデ 焼・普 外面底部及び胴部一部炭素付着 色・褐色 残・底部 胴部一部
坏	2	口径 20.6 器高 3.0	胎・白色粒子 石英 成・底部と口縁部接合 整・外面 底部ヘラケズ リ内面 底部ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 焼・普 色・褐色 残・2/3
坏	3	口径 12.8	胎・白色粒子 0.1~0.7cm砂礫 成・底部糸切り 整・内外面ロクロミ ズビキ 焼・普 色・灰黒色 残・底部 2/3 口縁部
坏	4	口径 13.2 器高 3.7	胎・白色粒子 石英 0.1~0.3cm砂礫 成・底部糸切り 整・内外面ロ クロミズビキ 焼・普 色・淡灰色 残・ほぼ完形(口縁部一部欠損)
坏	5	口径 13.0 器高 3.6	胎・石英 0.1~0.5cm砂礫 成・底部糸切り 整・内外面ロクンロミズ ビキ 焼・普 色・灰色 残・底部 口縁部 2/3
坏	6	口径 器高	胎・石英 0.1~0.2cm砂礫 成・底部糸切り 整・内外面ロクロミズビ キ 焼・普 色・灰色 残・1/2



坏	7	口径 13.9	胎・白色粒子 石英 0.1~0.3cm砂礫 成・底部糸切り 整・内外面口 クロミズビキ 焼・普 色・暗灰色 残・ 1/3
---	---	---------	---

将監塚遺跡B地点7号住居址出土遺物

器種	番号	法量(cm)	特 徴
坏	1	口径 12.7 器高 3.2	胎・石英 角閃石 成・底部と口縁部接合 整・外面 底部ヘラケズリ 内面 底部ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 焼・普 色・褐色 残・ 3/4
蓋	2	口径 18.4 器高 4.7 つまみ径 3.4	胎・石英 0.2~0.7cm砂礫 成・ロクロ 形・つまみ内部に突起 焼・ 普 色・外面 黄色味をおびた灰色、内面 黄色味の灰色・暗灰色の半々 残・完形
蓋	3		胎・石英 角閃石 砂粒 成・ロクロ 焼・普 形・2と同じ 色・外 面 黄色味の灰色~暗灰色 内面 淡灰色 残・ 1/8

将監塚遺跡B地点8号住居址出土遺物

器種	番号	法量(cm)	特 徴
甕	1	口径 19.4	胎・白色粒子 石英 角閃石 成・頸部接合 整・外面 胴部ヘラケズリ 内面 胴部ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 焼・普 色・褐色 残・ 胴部一部 口縁部 1/3
甕	2	口径 13.9	胎・石英 褐鉄粒 成・胴部と口縁部下半 口縁部下半と上半接合 整・ 外面 胴部ヘラケズリ 内面 胴部ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 焼・ 普 外面胴部及び口縁部炭素付着 色・赤褐色 残・胴部一部 口縁部 1/2
坏	3	口径 12.8 器高 4.7	胎・石英 角閃石 成・底部と胴部接合 整・外面 底部及び口縁部ヘ ラケズリ 口唇部ヨコナデ 内面 底部ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・普 外面口縁部及び内面炭素付着 色・褐色 残・完形
坏	4	口径 15.2 器高 3.9	胎・白色粒子 石英 成・底部と口縁部接合 整・外面 底部ヘラケズリ 内面 底部ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 焼・普 色・褐色 使・口縁 部内外面炭化物付着 残・ 3/4
坏	5	口径 12.5 器高 3.2	胎・石英 角閃石 成・底部と口縁部接合 整・外面 底部ヘラケズリ 内面 底部ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 形・底部内面に「十」字墨書 焼・普 色・褐色 残・完形
坏	6	口径 11.7 器高 3.0	胎・白色粒子 石英 成・底部と口縁部接合 整・外面 底部ヘラケズリ 内面 底部ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 焼・普 色・橙褐色 残・完形

坏	7	口径 12.3 器高 3.0	胎・石英 褐鉄粒 成・底部と口縁部接合 整・外面 底部ヘラケズリ 内面 底部ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 焼・普 外面底部及び口縁部 炭素付着 色・褐色 残・ほぼ完形
坏	8	口径 12.5 器高 3.1	胎・石英 褐鉄粒 成・底部と口縁部接合 整・外面 底部ヘラケズリ 内面 底部ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 焼・普 口縁部内外面炭素付 着色・褐色 残・ほぼ完形
坏	9	口径 13.1 器高 3.0	胎・石英 成・底部と口縁部接合 整・外面 底部ヘラケズリ 底部に 指頭調整 内面 底部ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 焼・普 外面底部 炭素付着 色・外面 褐色 内面 淡褐色 残・7/8
坏	10	口径 13.0 器高 3.3	胎・石英 褐鉄粒 成・底部と口縁部接合 整・外面 底部ヘラケズリ 内面 底部ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 形・底部凸凹有 焼・普 色・外面 褐色 内面 淡褐色 残・2/3
蓋	11	口径 14.7 つまみ高 1.8	胎・白色粒子 石英 成・つまみ貼付 台形 整・外面 ヘラケズリ 内 面 ヨコナデ 口縁部内外面ヨコナデ 焼・普 色・赤褐色 残・5/6 備・つまみはヘラケズリ及び角の面取り
坏	12		胎・白色粒子 0.1~0.4cm砂礫 成・高台貼付 整・内外面ロクロミ ズビキ 焼・普 色・灰色 残・底部 1/2 口縁部 1/8
坏	13	口径 12.3 器高 3.4	胎土・砂粒 黒雲母 白色粒子 褐鉄粒 成・底部と口縁部接合 整・ 外面底部 ヘラケズリ 口縁部 下半ヘラケズリ 上半ヨコナデ 内面 底部指頭痕有り 口縁部ヨコナデ 形・相模型模倣か? 焼・良好 色・ 黄褐色 残・完形
坏	14	口径 11.6 器高 3.8	胎・砂粒多 黒雲母 褐鉄粒 白色粒子 成・底部と口縁部接合 整・ 外面 糸切り後ヘラケズリ 口縁部 下半ヘラケズリ 上半ヘラケズリ 後回転ナデ 内面 底部 ナデ後放射状暗文 口縁部 回転ナデ後放射 状暗文形・内面底端部に沈線一条半 焼・良好 内面底部及び口縁部炭 素付着 色・茶褐色 残・完形
坏	15	口径 12.1 器高 3.8	胎・砂粒 白色粒子 石英 成・底部と口縁部接合 整・外面 底部ヘ ラケズリ 口縁部 下半ヘラケズリ 上半ヘラケズリ後回転ナデ 内面 底部 ナデ後暗文 口縁部回転ナデ後暗文 形・底部歪みが著しい 焼・良好 色・暗橙褐色 残・2/3
坏	16	口径(12.2) 器高 4.3	胎・砂粒 褐鉄粒 白色粒子 角閃石 成・底部と口縁部接合 整・外 面底部 ヘラケズリ 口縁部 下半ヘラケズリ 上半ヘラケズリ後回転 ナデ外面 底部 ナデ後暗文 口縁部回転ナデ後暗文 形・内面底端部 の沈線は甘い 焼・良好 色・暗橙褐色 残・1/2
坏	17	口径 12.0 器高 3.2	胎・白色粒子 0.1~0.4cm礫 整・外面 底部 回転ヘラケズリ 口縁 部 回転ナデ 内面 底部及び口縁部回転ナデ 焼・普 色・淡灰白色

坏	18	口径 12.5 器高 3.5	残・底部 口縁部3/4 胎・砂粒 石英 褐鉄粒 0.1~0.6cm礫 整・外面 底部糸切り後回転 ヘラケズリ 口縁部 回転ナデ 内面 底部及び口縁部回転ナデ 焼・ 須恵器にしては不良 色・明灰黄色 残・ほぼ完形
紡錘 車	19		土製 上直径 3.7cm 下直径 3.4cm 厚さ 1.5cm 孔径 0.6cm 全面 にヘラミガキ 全体の 2/3は黒色 1/3は淡褐色 ほぼ完形

将監塚遺跡B地点9号住居址出土遺物

器種	番号	法量(cm)	特 徴
甕	1	口径 19.4 器高 27.8	胎・白色粒子 石英 褐鉄粒 成・底部と胴部下半 胴部下半と上半 頸 部 口縁部下半と上半接合 整・外面 胴部ヘラケズリ 内面 胴部ナ デ 口縁部内外面ヨコナデ 焼・普 外面胴部及び口縁部炭素付着 色・褐色 残・3/4
甕	2	器高 27.3	胎・白色粒子 石英 褐鉄粒 成・底部と胴部下半 胴部下半と上半 頸 部接合 整・外面 胴部ヘラケズリ 内面 胴部ナデ 口縁部内外面ヨ コナデ 焼・普 色・外面 褐色 内面 赤褐色 残・1/2
坏	3	口径 11.8 器高 3.7	胎・石英 褐鉄粒 成・底部と口縁部接合 整・外面 底部ヘラケズリ 内面 底部ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 焼・普 色・褐色 残・完形
坏	4	口径 12.4 器高 3.3	胎・石英 褐鉄粒 成・底部と口縁部接合 整・外面 底部ヘラケズリ 内面 底部ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 焼・普 内面炭素付着 色・ 外面 褐色 内面 暗褐色 使・内外面炭化物付着 残・3/4
坏	5	器高 3.4	胎・白色粒子 石英 成・底部と口縁部接合 整・外面 底部ヘラケズ リ 内面 底部ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 形・底部内面「≠」字墨 書 焼・普 色・褐色 残・1/3
坏	6	口径 11.6 器高 3.0	胎・白色粒子 石英 0.1~0.4cm砂礫 成・底部糸切り 焼・普 色・ 淡褐色 残・底部 1/4 口縁部 3/4
蓋	7	つまみ径 2.9	胎・石英 0.1~0.4cm砂礫 成・ロクロ成形 つまみ貼付 形・つまみ 上端中央部突起状 焼・普 色・灰色 残・1/2

将監塚遺跡B地点10号住居址出土遺物

器種	番号	法量(cm)	特 徴
甕	1	口径 21.9	胎・白色粒子 石英 褐鉄粒 成・頸部接合 整・外面 銅部ヘラケズリ 内面 胴部ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 焼・普 色・褐色 残・胴部 一部 口縁部 3/4

甕	2	口径 20.1	胎・白色粒子 石英 褐鉄粒 成・頸部接合 整・外面 胴部ヘラケズリ 内面 胴部ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 焼・普 色・褐色 使・外面 胴部炭化物付着 残・胴部一部 口縁部 1/2
甕	3	口径 19.4	胎・石英 白色粒子 角閃石 褐鉄粒 成・頸部接合 整・外面 底部 ヘラケズリ ヘラオサエ痕あり 内面 胴部ナデ 口縁部内外面ヨコナ デ 焼・普 色・赤褐色 残・胴部一部 口縁部 1/2
台付 甕	4		胎・白色粒子 石英 褐鉄粒 成・裾部と脚部 脚部と胴部接合 整・ 裾甕部及び脚部内外面ヨコナデ 焼・普 色・赤褐色 残・台部
坏	5	器高 10.3	胎・白色粒子 石英 褐鉄粒 成・底部と口縁部接合 整・外面 底部 ヘラケズリ 内面 底部ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 焼・普 色・褐 色 残・1/2
坏	6	口径 13.0 器高 3.1	胎・白色粒子 石英 角閃石 成・底部と口縁部接合 整・外面 底部 ヘラケズリ 内面 底部ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 焼・普 色・明 褐色 残・ほぼ完形
坏	7	口径 12.6 器高 3.6	胎・白色粒子 石英 角閃石 成・底部と口縁部接合 整・外面 底部 ヘラケズリ 内面 底部ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 焼・普 外面底 部炭素付着 色・褐色 残・ほぼ完形
坏	8	口径 12.1 器高 3.6	胎・白色粒子 石英 褐鉄粒 成・底部と口縁部接合 整・外面 底部 ヘラケズリ 内面 底部ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 焼・普 色・外 面 褐色 内面 淡褐色 残・底部 口縁部 3/4
坏	9	口径 12.1 器高 3.7	胎・白色粒子 石英 角閃石 砂粒 成・底部と口縁部接合 整・外面 底部ヘラケズリ 内面 底部ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 焼・普 色・橙褐色 残・底部 口縁部 1/6
坏	10	口径 12.2 器高 3.2	胎・石英 褐鉄粒 成・底部と口縁部接合 整・外面 底部ヘラケズリ 内面 底部ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 焼・普 色・褐色 使・内面 に炭化物付着 残・3/4
坏	11	口径 12.5 器高 3.6	胎・石英 白色粒子 成・底部と口縁部接合 整・外面 底部ヘラケズ リ 内面 底部ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 焼・普 色・褐色 残・ 2/3
坏	12	口径 12.0 器高 3.3	胎・石英 角閃石 成・底部と口縁部接合 整・外面 底部ヘラケズリ 内面 底部ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 焼・普 色・褐色 残・2/3
坏	13	口径 12.7 器高 3.4	胎・石英 褐鉄粒 成・底部と口縁部接合 整・外面 底部ヘラケズリ 内面 底部ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 焼・普 色・暗褐色 残・2/3
坏	14	口径(12.6) 器高 3.4	胎・白色粒子 石英 角閃石 成・底部と口縁部接合 整・外面 底部 ヘラケズリ 内面 底部ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 焼・普 色・淡 褐色 残・底部 3/4 口縁部 1/3

坏	15	口径(23.0) 器高 2.8	胎・石英 角閃石 成・底部と口縁部接合 整・外面 底部ヘラケズリ 内面 底部ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 焼・普 外面炭素付着 色・ 褐色 残・底部 2/3 口縁部 1/3
坏	16	口径 12.6 器高 2.8	胎・白色粒子 石英 角閃石 成・底部と口縁部接合 整・外面 底部 ヘラケズリ 口縁部ヨコナデ 内面 底部ナデ後螺旋状暗文 底部から 口縁部にかけてヨコナデ後暗文 焼・普 色・明褐色 残・ 2/3
坏	17	口径 13.5 器高 3.1	胎・白色粒子 石英 褐鉄粒 成・底部と口縁部接合 整・外面 底部 ヘラケズリ 口縁部ヨコナデ 内面 底部ナデ 口縁部ヨコナデ後ヘラ ミガキ 焼・普 外面底部炭素付着 色・外面 底部黒色 口縁部暗褐 色 内面 明褐色 残・ 1/2
坏	18	口径 12.4 器高 3.1	胎・石英 角閃石 成・底部と口縁部接合 整・外面 底部ヘラケズリ 内面 底部ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 焼・普 色・褐色 残・ 1/2
坏	19	口径 12.1 器高 3.3	胎・石英 角閃石 成・底部と口縁部接合 整・外面 底部ヘラケズリ 内面 底部ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 焼・普 色・褐色 残・ 1/2
坏	20	口径 11.5 器高 2.8	胎・石英 褐鉄粒 成・底部と口縁部接合 整・外面 底部ヘラケズリ 内面 底部ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 焼・普 色・暗褐色 残・ 1/2
坏	21	器高 3.3	胎・石英 褐鉄粒 成・底部と口縁部接合 整・外面 底部ヘラケズリ 内面 底部ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 焼・普 色・褐色 残・ 1/2
坏	22	器高 2.8	胎・白色粒子 石英 褐鉄粒 成・底部と口縁部接合 整・外面 底部 ヘラケズリ 内面 底部ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 焼・普 色・灰 褐色 残・ 1/2
坏	23	器高 3.0	胎・白色粒子 石英 褐鉄粒 成・底部と口縁部接合 整・外面 底部 ヘラケズリ 内面 底部ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 焼・普 色・褐 色 残・ 1/3
坏	24	口径 12.4 器高 4.3	胎・石英 褐鉄粒 成・底部と口縁部接合 整・外面 底部ヘラケズリ 口縁部ヨコナデ 内面 底部ナデ 口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ 焼・ 普色・褐色 残・ 2/3
坏	25	口径 11.9 器高 3.2	胎・石英 褐鉄粒 成・底部と口縁部接合 整・外面 底部ヘラケズリ 内面 底部ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 焼・普 色明褐色 残・ 2/3
坏	26	口径 12.1	胎・白色粒子 石英 成・底部と口縁部接合 整・外面 底部ヘラケズ リ 内面 底部ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 焼・普 色・外面 褐色 内面 明褐色 残・底部一部 口縁部 1/2
甕	27		胎・白色微石多 0.1~0.4cm砂礫 整・内外面ロクロミズビキ 焼・普 色・暗灰色 残・胴部一部 口縁部一部
壺	28	口径 9.0	胎・石英 白色微石 成・ロクロ 焼・普 色・暗灰色 残・口縁部
坏	29	器高 6.6	胎・石英 0.1~0.3cm砂礫 整・底部糸切り後ヘラケズリ 内外面ミズ

坏	30	器高 2.9	ビキ 焼・普 色・灰白色 残・底部 口縁部 1/4
坏	31	口径(13.0) 器高 3.6	胎・石英 白色微石 0.1~0.5cm砂礫 整・底部糸切り後ヘラケズリ 内外面ミズビキ 焼・普 色・暗青灰色 残・底部 口縁部 1/3
蓋	32	口径 18.6 3.1	胎・石英 0.1~0.7cm砂礫 成・ロクロ成形 つまみ貼付(径 3.8) 形・つまみ 先端内部に突起 焼・悪 色・淡灰色 残・ほぼ完形(一部欠損)
蓋	33	口径(9.0) 器高 2.6	胎・石英 成・ロクロ成形 形・つまみ先端中央部もりあがる 焼・普 色・外面 灰色 一部暗灰色 内面 青灰色 残・つまみ部(径 1.5)

将監塚遺跡B地点11号住居址出土遺物

器種	番号	法量(cm)	特 徴
甕	1	口径(20.8)	胎・白色粒子 角閃石 石英 褐鉄粒 成・頸部接合 整・外面 胴部ヘラケズリ 内面 胴部ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 焼・普 色・褐色 残・胴部一部 口縁部 1/3
甕	2		胎・石英 角閃石 成・頸部 口縁部下半と上半接合 整・外面 胴部ヘラケズリ 内面 胴部ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 焼・普 外面炭化物付着 色・外面 黒灰色 内面 淡褐色 使・内面炭化物付着 残・胴部一部 口縁部一部
坏	3	口径 12.5 器高 3.5	胎・石英 角閃石 成・底部と口縁部接合 整・外面 底部ヘラケズリ 内面 底部ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 焼・普 色・褐色 残・完形
坏	4	口径 11.8 器高 3.1	胎・白色粒子 石英 角閃石 成・底部と口縁部接合 整・外面 底部ヘラケズリ 内面 底部ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 形・底部凸凹有り 焼・普 色・褐色 残・ほぼ完形
坏	5	口径 11.6 器高 3.2	胎・白色粒子 石英 角閃石 砂粒 成・底部と口縁部接合 整・外面 底部ヘラケズリ 内面 底部ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 焼・普 色・明褐色 残・完形
坏	6	口径 13.5 器高 3.9	胎・石英 白色微石 褐鉄粒 0.1~0.3cm砂礫 成・ロクロ成形 整・底部糸切り 内外面ロクロミズビキ 焼・普 色・外面 底部と口縁部 下半灰色 口縁部上半黒灰色 内面 灰色 残・ほぼ完形

将監塚遺跡B地点12号住居址出土遺物

器種	番号	法量(cm)	特 徴
坏	1	口径 13.3 器高 3.4	胎・石英 角閃石 砂粒 成・底部と口縁部接合 整・外面 底部ヘラケズリ 内面 底部ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 焼・普 色・褐色 残・底部 口縁部 3/4

将監塚遺跡B地点13号住居址出土遺物

器種	番号	法量(cm)	特 徴
坏	1	口径(13.2) 器高 3.6	胎・白色粒子 石英 褐鉄粒 成・ロクロ 整・底部糸切り後ヘラナデ 焼・悪 色・内外面灰褐色と暗灰色半々 残・底部 口縁部 1/3

将監塚遺跡B地点14号住居址出土遺物

器種	番号	法量(cm)	特 徴
坏	1	口径 14.0 器高 4.5	胎・白色粒子 角閃石 石英 成・底部と口縁部接合 整・外面 底部ヘラケズリ 内面 底部ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 焼・普 色・褐色 残・完形
坏	2	口径 15.0 器高 4.4	胎・石英 褐鉄粒 成・底部と口縁部接合 整・外面 底部ヘラケズリ 後ヘラオサエ有り 内面 底部ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 焼・普 色・赤褐色 使・内面炭化物付着 残・ほぼ完形
坏	3	口径 12.4 器高 3.1	胎・石英 褐鉄粒 成・底部と口縁部接合 整・外面 底部ヘラケズリ 内面 底部ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 焼・普 色・褐色 残・完形
坏	4	口径 11.5 器高 3.3	胎・白色粒子 石英 角閃石 褐鉄粒 成・底部と口縁部接合 整・外 面底部ヘラケズリ 内面 底部ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 焼・普 色・褐色 残・底部 口縁部 2/3
坏	5	口径(12.0) 器高 2.8	胎・白色粒子 石英 角閃石 成・底部と口縁部接合 整・外面 底部ヘラケズリ 内面 底部ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 焼・普 色・外 面 褐色 内面 淡褐色 残・1/2
坏	6	口径(11.8) 器高 4.3	胎・石英 角閃石 成・底部と口縁部接合 整・外面 底部ヘラケズリ 内面 底部ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 焼・普 色・褐色 残・1/2
坏	7	器高 3.7	胎・石英 角閃石 成・底部と口縁部接合 整・外面 底部ヘラケズリ 後ナデ 内面 底部ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 形・内面口縁部「卅」 状線刻 焼・普 色・褐色 残・底部 口縁部 1/5
坏	8	口径 11.6	胎・白色粒子 石英 0.1~0.2cm砂礫 成・ロクロ 整・底部糸切り後

坏	9	器高	3.6	回転ヘラケズリ 内外面ミズビキ 焼・普 色・灰褐色 残・ほぼ完形
		口径	10.0	胎・白色微石 0.1～0.3cm砂礫 成・ロクロ 整・底部糸切り後回転
坏	10	器高	3.4	ヘラケズリ 内外面ミズビキ 焼・普 色・灰色 残・ほぼ完形
		器高	4.1	胎・石英 0.1～0.2cm砂礫 成・ロクロ 整・底部糸切り 内外面ミズビキ 焼・普 色・外面 底部と口縁部下半灰褐色 上半灰色 内面 灰 褐色 残・底部 口縁部 1/3

将監塚遺跡B地点15号住居址出土遺物

器種	番号	法量(cm)	特 徴
甕	1	口径 20.2	胎・白色粒子 石英 角閃石 褐鉄粒 成・胴部下半と上半 胴部と口縁部接合 整・外面 胴部ヘラケズリ 内面 胴部ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 焼・普 色・赤褐色 残・胴部 3/4 口縁部
甕	2	口径 20.2 器高 28.2	胎・白色粒子 石英 角閃石 褐鉄粒 成・底部と胴部 胴部下半と上半頸部接合 整・外面 胴部ヘラケズリ 内面 胴部ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 焼・普 色・褐色 使・内面胴部風化 残・1/2
坏	3	口径 16.6 器高 2.7	胎・石英 角閃石 褐鉄粒 成・底部と口縁部接合 整・外面 底部ヘラケズリ 内面 底部ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 焼・普 色・内外面褐色 明褐色半々 残・完形
坏	4	口径 12.4 器高 3.4	胎・白色粒子 石英 角閃石 成・底部と口縁部接合 整・外面 底部ヘラケズリ 内面 底部ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 焼・普 色・明褐色 残・完形
坏	5	口径 12.5 器高 3.2	胎・石英 褐鉄粒 成・底部と口縁部接合 整・外面 底部ヘラケズリ 内面 底部ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 焼・普 内外面炭素付着色・外面底部一部褐色 他は黒褐色 使・内外面炭化物付着 残・完形
坏	6	口径 12.1 器高 3.1	胎・石英 褐鉄粒 成・底部と口縁部接合 整・外面 底部ヘラケズリ 内面 底部ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 焼・普 内外面炭素付着色・底部褐色 黒褐色半々 使・外面剝離 内面底部風化顕著 残・完形
坏	7	口径 11.9 器高 3.3	胎・石英 角閃石 褐鉄粒 成・底部と口縁部接合 整・外面 底部ヘラケズリ 内面 底部ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 焼・普 色・明褐色 残・底部 口縁部 2/3
坏	8	口径 11.9	胎・石英 角閃石 褐鉄粒 成・底部と口縁部接合 整・外面 底部ヘラケズリ 内面 底部ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 焼・普 色・褐色 使・内面炭化物付着 残・底部 1/4 口縁部 2/3
坏	9	口径 12.2 器高 3.5	胎・石英 角閃石 褐鉄粒 成・底部と口縁部接合 整・外面 底部ヘラケズリ 内面 底部ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 焼・普 色・褐色



				残・1/2
長頸壺	10	底径 14.0	胎・褐鉄粒 砂粒 成・ロクロ 整・高台部貼付 焼・普 色・白灰色 残・底部 胴部	
短頸壺	11	底径 10.9	胎・白色微石 0.1~0.6cm 砂礫 成・ロクロ 整・高台部貼付 焼・普 色・黒灰色 残・底部 胴部 1/3	
坏	12	口径 13.1 器高 3.7	胎・砂粒 褐鉄粒 黒色粒子 0.1~0.4cm 礫 整・外面 底部糸切り 内面 底部 回転ナデ 口縁部内外面回転ナデ 焼・良好 色・青灰黄色 使・口縁部内外面リング状に煤付着 残・完形	
坏	13	口径 12.8 器高 4.0	胎・白色針状物質 砂粒 0.1~0.4cm 砂礫 整・外面 底部糸切り後回転ヘラケズリ 底部 回転ナデ 口縁部内外面回転ナデ 焼・良好 外面 口縁部鉄釉状 色・暗青灰色 残・底部 口縁部2/3	
坏	14	口径 13.1 器高 3.8	胎・褐鉄粒 白色粒子 砂粒 0.1~0.4cm 砂礫 整・外面 底部糸切り 内面 底部 回転ナデ 口縁部内外面回転ナデ 焼・やや不良 色・灰黄白色 残・ほぼ完形	
坏	15	口径 12.1 器高 4.1	胎・白色粒子 褐鉄粒 砂粒 石英 成・底部と口縁部接合 整・外面 底部 ヘラケズリ 口縁部 下半ヘラケズリ 上半回転ナデ 内面 底部 ナデ後暗文 口縁部 回転ナデ後暗文 形・内面底端部に沈線 焼・良好 色・橙茶褐色 残・ほぼ完形	

将監塚遺跡B地点大溝出土遺物

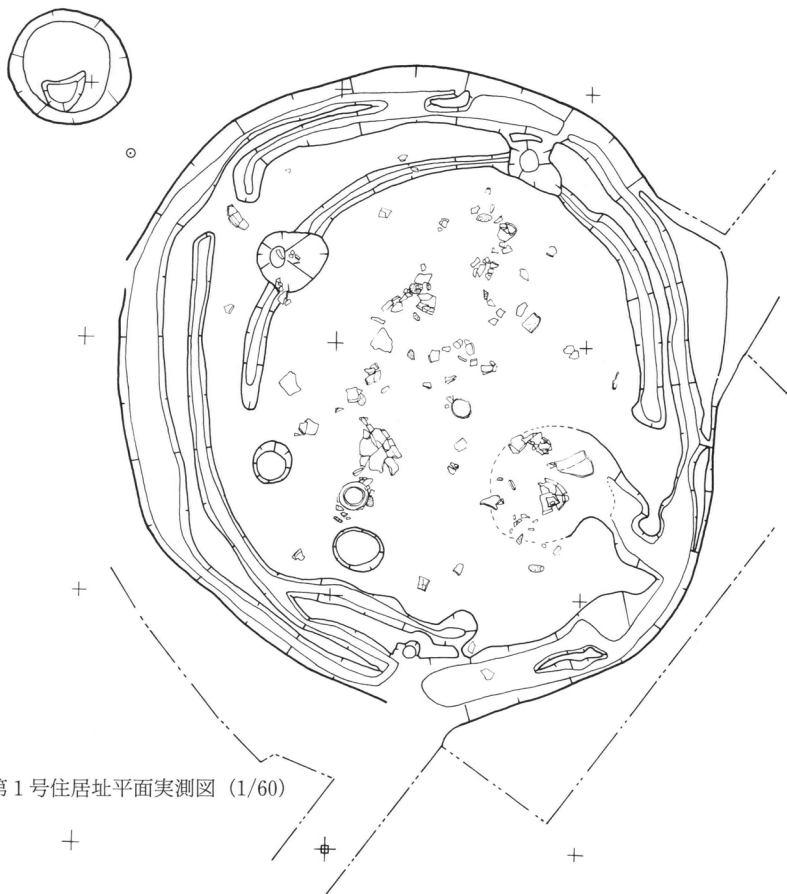
器種	番号	法量(cm)	特 徴
坏	1	口径 13.0 器高 4.1	胎・石英 角閃石 褐鉄粒 成・底部と口縁部接合 整・外面 底部ヘラケズリ 内面 底部ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 焼・普 色・褐色 残・ほぼ完形
坏	2	口径 11.7 器高 3.6	胎・石英 角閃石 成・底部と口縁部接合 整・外面 底部ヘラケズリ 内面 底部ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 焼・普 外面黒斑有り 色・外面明褐色 内面淡褐色 残・ほぼ完形
坏	3	器高 2.2	胎・石英 褐鉄粒 0.1~0.3cm 砂礫 成・ロクロ 整・底部糸切り 内外面ミズビキ 焼・普 口縁部内外面炭素付着 色・黄褐色 残・底部 口縁部 1/4
長頸瓶	4	底径 9.2	胎・褐鉄粒 0.1~0.3cm 砂礫 成・ロクロ 整・高台部貼付 焼・普 外面胴上部と内面底部釉付着 色・外面下半暗灰色 上半緑灰色 内面灰色 残・底部 胴部 1/2

将監塚遺跡B地点1号溝出土遺物

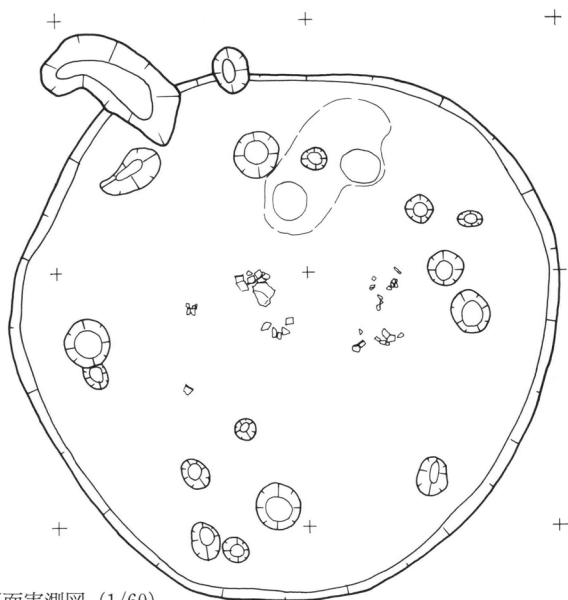
器種	番号	法量(cm)	特 徴
坏	1	口径 12.3 器高	胎・石英 褐鉄粒 0.1~0.7cm砂礫 成・ロクロ 整・底部糸切り 内 外面ミズビキ 焼・普 色・灰色 残・底部 口縁部 1/2
坏	2		胎・白色微石 0.1~0.3cm砂礫 成・高台貼付 整・内外面ロクロミズ ビキ 焼・普 色・灰色 残・底部 口縁部 1/4

将監塚遺跡B地点住居址以外の出土遺物（縄文土器）

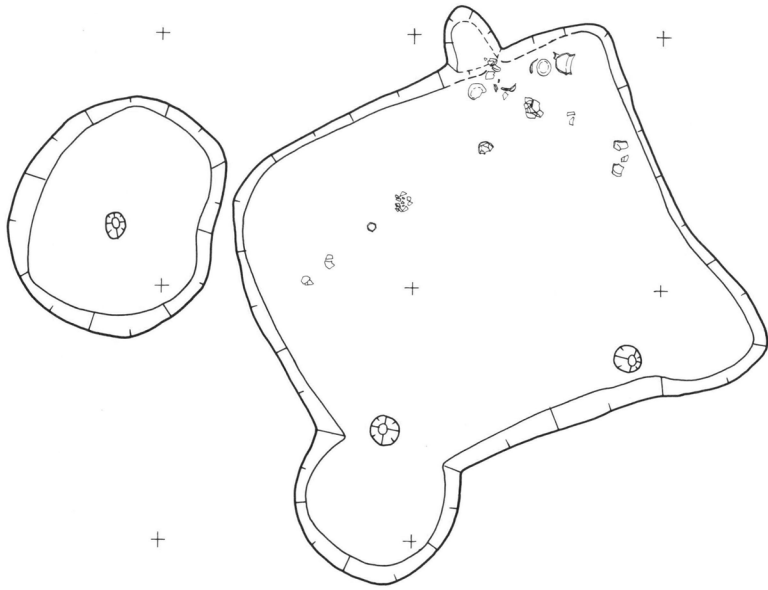
器種	番号	法量(cm)	特 徴
深鉢	1		胎・白色粒子 褐鉄粒 石英 砂粒多 0.1~1.1cm礫 焼・悪 色・赤 褐色 残・3/4 文様・R-T 出・0号土壌
深鉢	2		胎・白色粒子 石英 砂粒 焼・普 色・褐色 残・一部 文様・R-T 出・25号土壌
深鉢	3		胎・白色粒子 石英 砂粒 焼・良好 色・褐色 残・胴部一部 口縁 部3/5 文様・R-T 出・4号住居址と85号土壌で接合
深鉢	4		胎・白色粒子 石英 砂粒 焼・良好 色・褐色 残・上位2/3 文様・ Y-R-T 出・85号土壌
深鉢	5		胎・白色粒子 石英 砂粒 焼・普 色・明褐色 残・一部 文様・Y -R-T 出・85号土壌
深鉢	6		胎・白色粒子 石英 砂粒 焼・普 色・明褐色 残・一部 文様・J -T 出・85号土壌



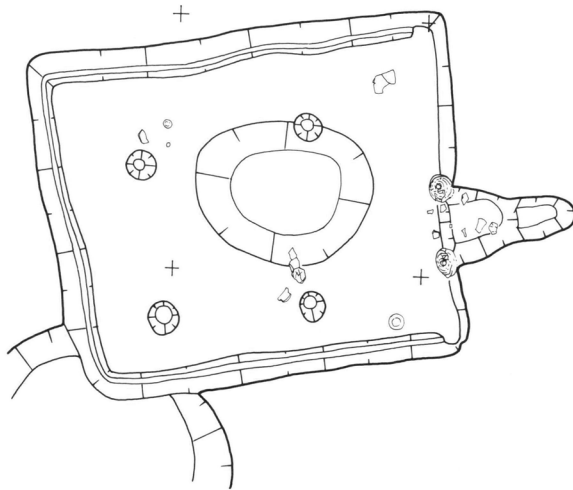
将監塚遺跡B地点第1号住居址平面实测图 (1/60)



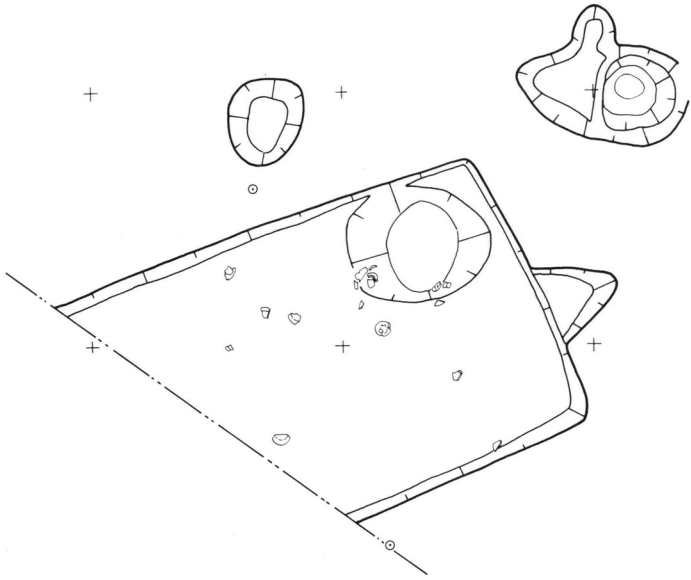
将監塚遺跡B地点第2号住居址平面实测图 (1/60)



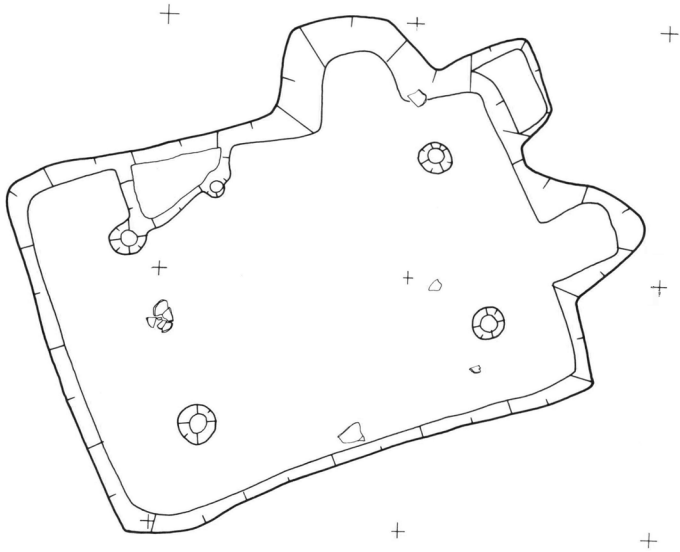
将監塚遺跡B地点第3号住居址平面実測図 (1/60)



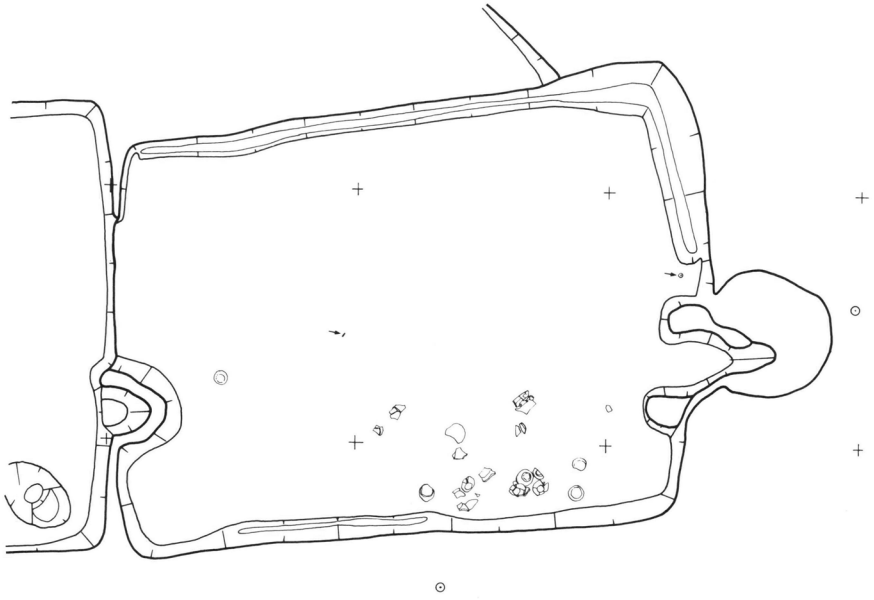
将監塚遺跡B地点第4号住居址平面実測図 (1/60)



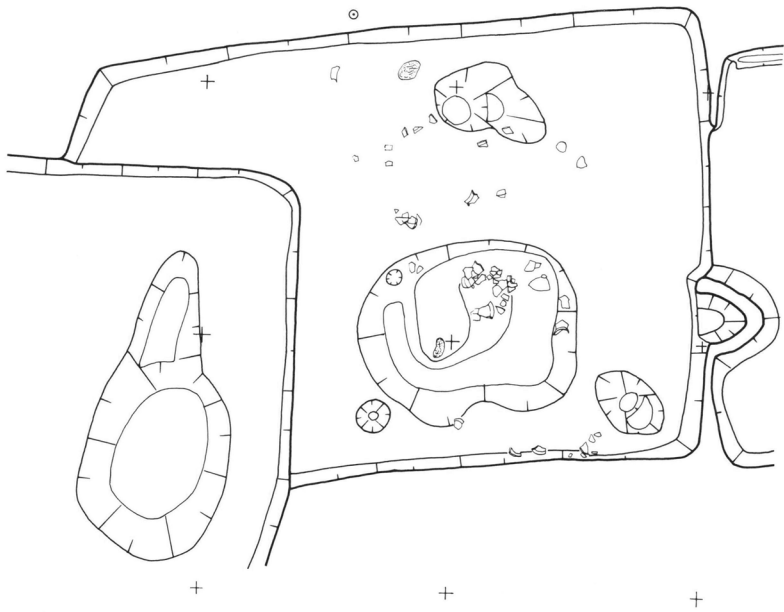
将監塚遺跡B地点第6号住居址平面实测图 (1/60)



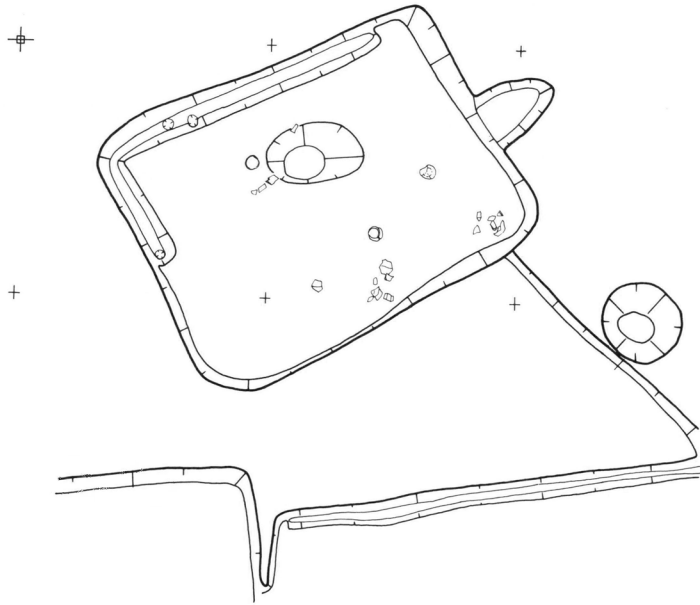
将監塚遺跡B地点第7号住居址平面实测图 (1/60)



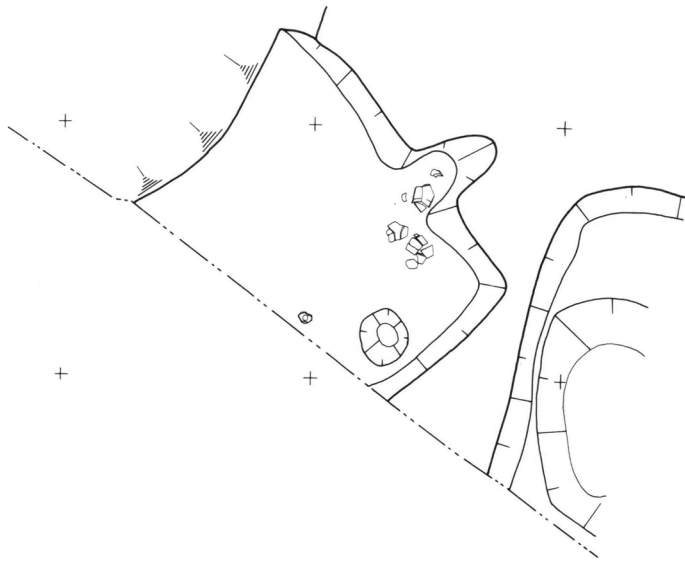
将監塚遺跡B地点第8号住居址平面实测图 (1/60)



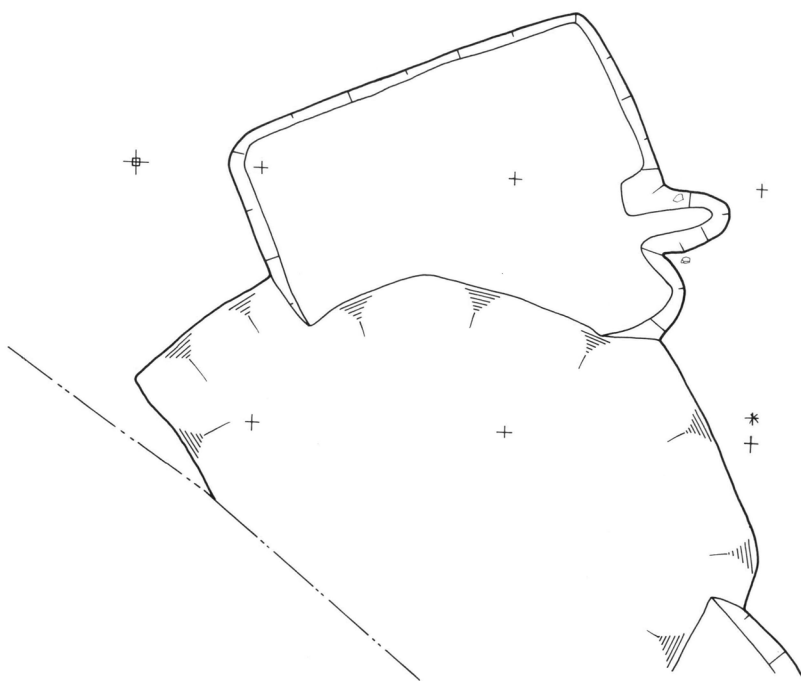
将監塚遺跡B地点第9号住居址平面实测图 (1/60)



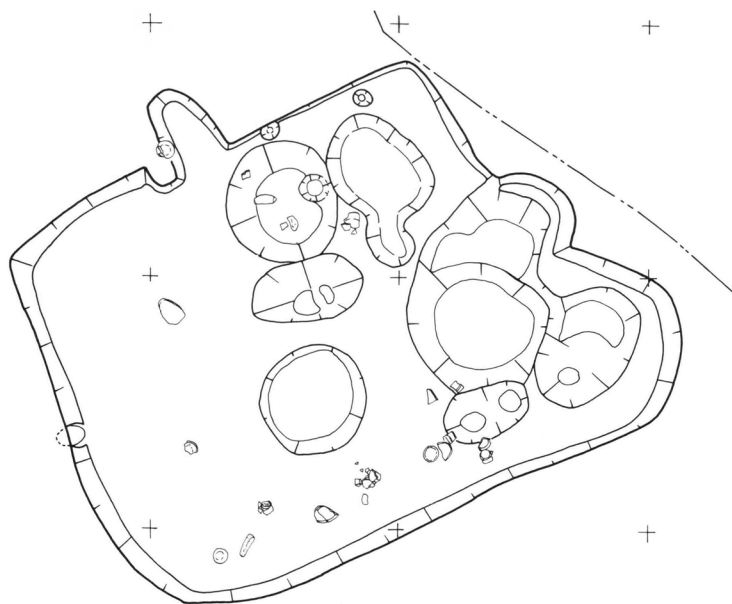
将監塚遺跡B地点第11号住居址平面实测图 (1/60)



将監塚遺跡B地点第12号住居址平面实测图 (1/60)

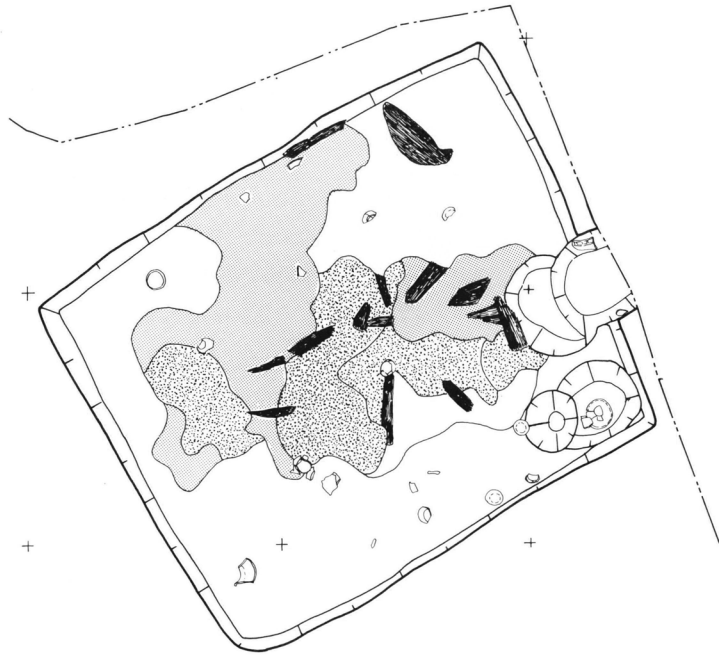


将監塚遺跡B地点第13号住居址平面実測図 (1/60)

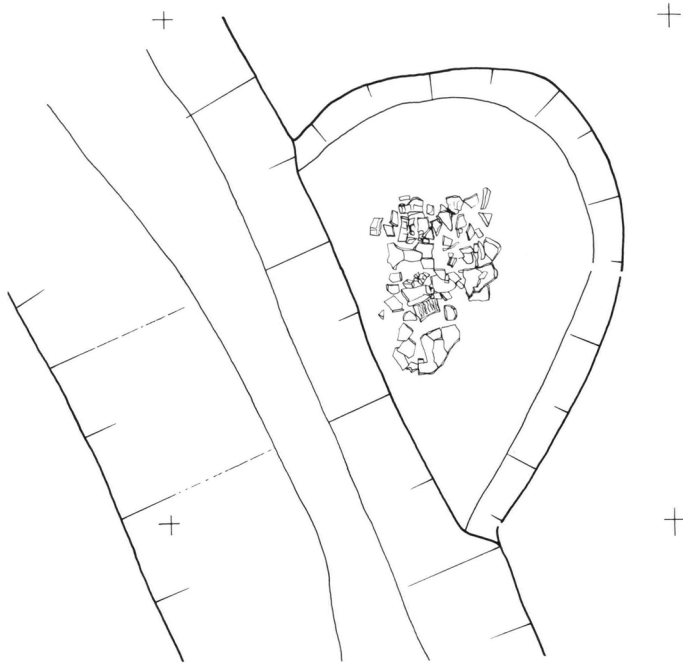


将監塚遺跡B地点第14号住居址平面実測図 (1/60)





将監塚遺跡B地点第15号住居址平面实测图 (1/60)



将監塚遺跡B地点第85号土坑平面实测图 (1/60)

## 2 調査のまとめ

今回の発掘調査は、その対象面積が5,956㎡という広い範囲ではあったが、試掘調査の所見から遺構の分布は散漫であり、当初から長期の日時と経費を要することは考えられなかった。結果的に縄文時代住居址2、奈良平安時代住居址12、住居址状遺構1、土壇168、大溝1、溝2、近代排水溝3などの遺構を検出したが、数の多い土壇についてはその大半が、近世から現代にかけての時期が推定される。この地域一帯は、昭和17年から児玉飛行場として使用され、今回の調査区域は滑走路区域と本部区域の境界から滑走路区域へ100m程度離れているにすぎず、当時の証言から敵機の襲来に対処するためにタコ壺を各所に掘るなど、遺構にとっては様々な攪乱がなされている。遺構の分布が疎らであるとは言え、ヒューム管を埋設した排水溝の確認、土壇からのペーゴマの検出、試掘時点での13mmの機銃弾等の検出など、通常の発掘調査では考えられないような遺構、遺物に触れることができた。この飛行場を建設するについては、周辺住民や小中学生を動員しての均地作業、滑走路づくり、排水管付設、そして必要とする玉石、砂利運搬等が、現在でも語り継がれている。しかし当時小学生、中学生として勤労奉仕に明け暮れた人々には、何のための玉石、砂利運搬であったかを「滑走路に使う」程度としか知らせていなかった。現実的に、勤労奉仕に駆り出された人々の数は膨大なものになり、加えて重爆撃機（飛龍・呑龍）の発着を可能とするための滑走路延長にあたって、勤労奉仕として多くの人々が駆り出されている事実の遺跡として調査前から注意していたものである。本庄市、あるいは私の調査の最も新しい遺構であり、今後も現代史をこのような形で確認しておくことも、長い目で見ただけに必要になってくると考えられる。ともあれ、敢えてまとめとして掲げるならば次のようなことが列記されよう。

- 1、縄文時代の遺物としては、将監塚遺跡61号住居址出土遺物と同様、勝坂期の終末から加曾利E期の土器の出現する段階、言い換えれば併存する時期にあたり、この時期資料の増加と言える。
- 2、3号・8号・15号住居址から合計5点の甲斐型を模倣した坏がみられることである。埼玉県内では岡部町白山遺跡からの出土が知られているが、3・15号住居址から各1点、8号住居址からは3点の坏が確認できることは注目に値する。本書での遺物番号11の蓋もこの8号住居址からの検出であり、土師質、また須恵質の土器としても特異な形態を示している。通常つまみと異なり、横に穿孔するなどは当地域周辺でも初見であろうと考えられる。土製の紡錘車、鉄製鎌などの伴出もこれらに関わるものであろうか。今後の研究に期待したい。
- 3、考古学的調査の成果のみならず、本庄市における調査体制や文化財保護の協議についても少なからぬ成果があったことも特筆しておきたい。開発と保存という相対立する立場にありながら、委託先であるエステー化学株式会社とは度重なる協議は紳士的に、今後の模範となるべく協議を行うことができたことは今後の埋蔵文化財保護に関わる特筆すべき大きな成果の一つであったとも言える。

最後にエステー化学株式会社埼玉工場の工場長森田栄氏、同業務課長藤井陸氏、同五十幡友良氏及び社員の皆様には、並々ならない御配慮を賜った。本報告書の最後にあたり、埋蔵文化財保護行政に携わる者を代表して、伏して感謝申し上げます。

# 住居址出土の甲斐型模倣坏をめぐって

田尾 誠 敏

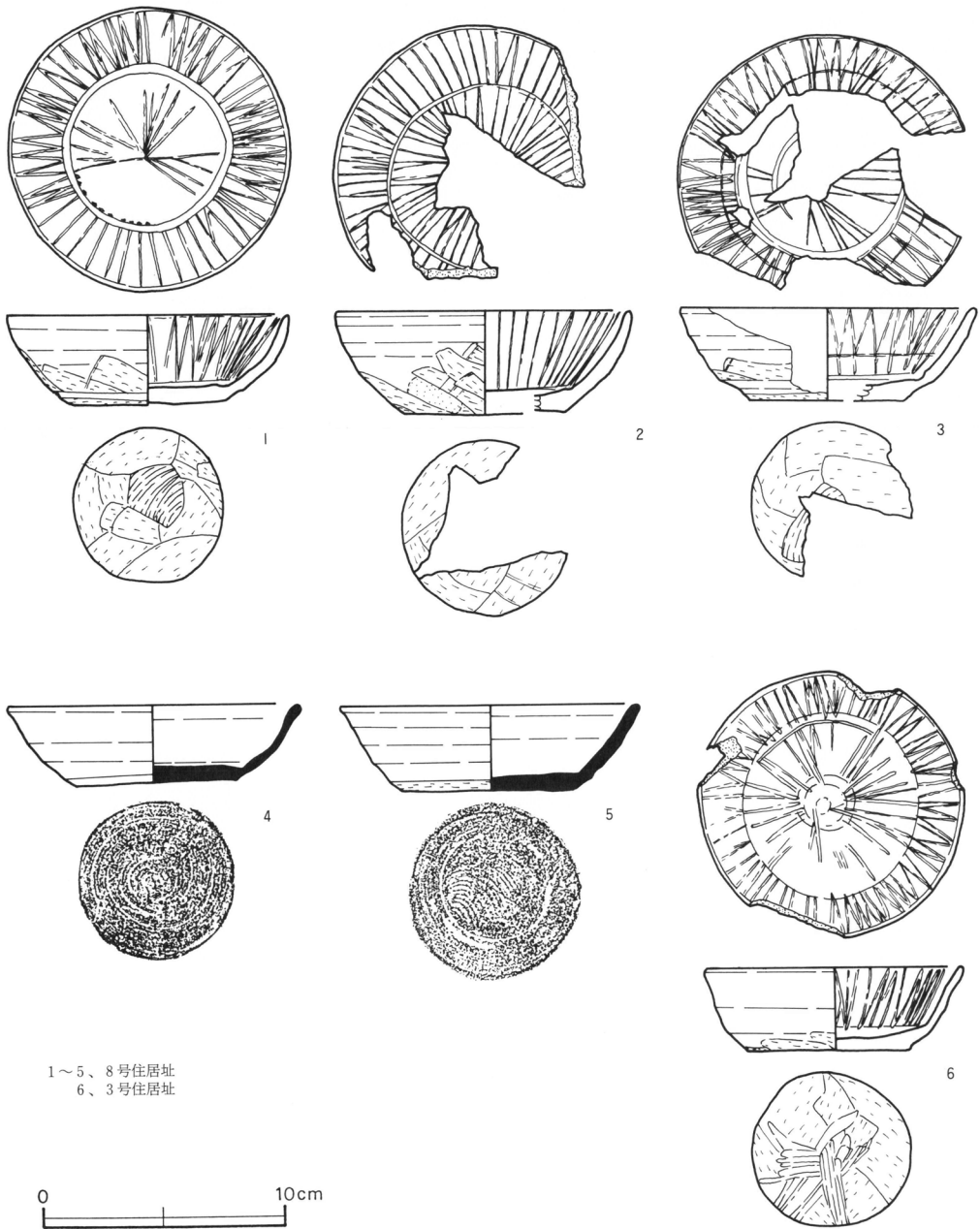
## はじめに

奈良・平安時代を中心とする本遺跡の住居址からは、当該時期の遺物が多数出土している。その中には、在地産の土師器坏とは形態・技法が明らかに異なる、注目すべき一群の土師器坏が存在している。この特徴的な非在地系土師器坏は、3号住居址・15号住居址よりそれぞれ1点、8号住居址より3点出土している。これら5点の土師器坏の共通する特徴は、ロクロ成形を用いた平底の形態と、体部・底部内面の放射状暗文および体部外面下半部の斜方向のヘラケズリに代表される。このような諸特徴は、甲府盆地を生産・消費の中心とする、いわゆる「甲斐型坏」の特徴と共通するものである。しかしながら、本遺跡出土の土師器坏には、扁平な形態および底部整形の手法や暗文・ヘラケズリの細部での相違など、甲斐型坏とは異なる点も多々見受けられる。これらの相違点を考慮すると、本遺跡出土の平底暗文坏は、甲斐型坏を模倣して甲斐地方以外の場所で生産されたものであると結論づけられる。以下本稿では、これら甲斐型模倣坏を紹介するとともに、これをめぐる二・三の問題点について検討を加えてみたい。

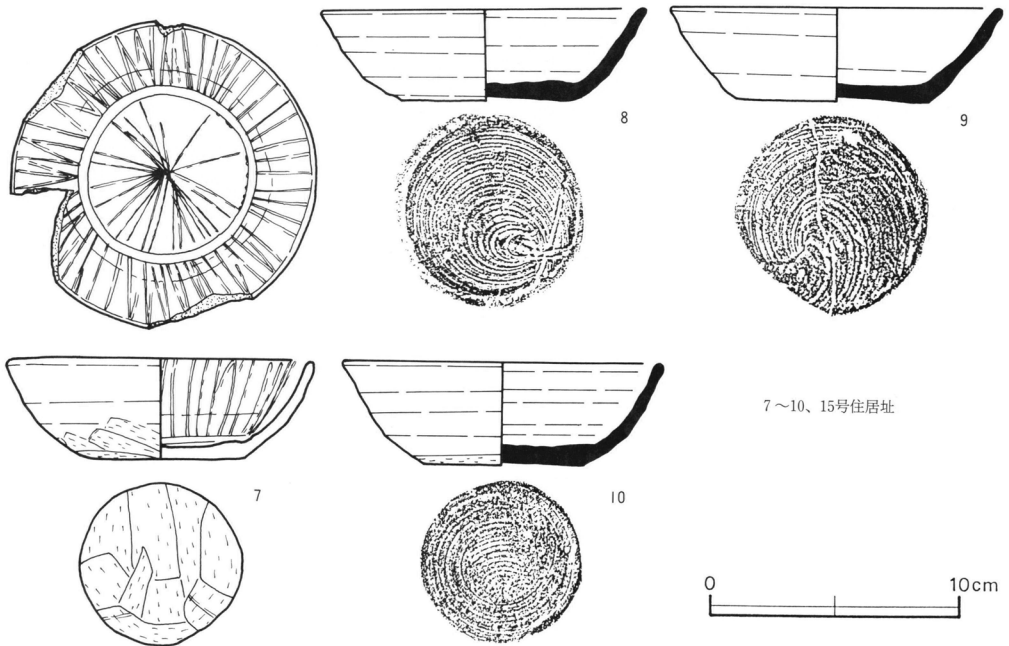
## 1. 甲斐型模倣坏の位置付け

第1図・第2図に示したものが、甲斐型模倣坏と供伴する須恵器坏である。

8号住居址からは、甲斐型模倣坏が3点まとまって出土している(第1図1～3)。3号住居址および15号住居址からは、それぞれ1点ずつが出土している(第1図6・第2図7)。甲斐型模倣坏は、暗橙褐色から暗茶褐色の色調を呈し、胎土には甲斐型坏の特徴である橙色の粒子は含まない。3号住居址出土の6が、甲斐型坏本来の色調に最も近いといえる。これらは全てロクロを用いて成形されており、1・3などは底部と体部の接合部が沈線状にくぼんでいるため、外面の斜方向のヘラケズリが途切れたようになっている。このような底部・体部の接合状況は、しばしば須恵器坏にみられる特徴であろう。体部外面のヘラケズリは、甲斐型坏よりも弱々しい。1・3の底部外面は、回転糸切りの後に、中央部に糸切り痕を残し、外周を手持ちヘラケズリによって広く消している。2は底部中央を欠損しているが、やはり同様の整形を施しているものと思われる。また6・7は回転糸切りの後に、底部全面に手持ちによるヘラケズリを施している。甲斐型坏最大の特徴である内面の暗文を見た場合、6以外は見込み部の暗文が体部のそれに比べて細いという特徴がある。見込み部の暗文は、2以外はまばらな放射状暗文であったり、一部が弱く確認できないものもある。体部のそれも、2のようにほとんどが1本線の放射状であるものや、部分的には山形の放射状暗文を施すが途中で1本線になっているものなど、暗文に手抜きが見られる。しかしながら、6以外は古手の甲斐型坏に一般的に見られる、内面体部・底部の境に施す暗文状の沈線まで模倣しており、要所要所は忠実に模倣しているといっ



第1図 甲斐型模倣坏と供伴する須恵器坏(1)



第2図 甲斐型模倣坏と供伴する須恵器坏(2)

てよいだろう。器形は、平底の底部と内湾しながら上外方にのびる体部を有する。ただし器高は低く偏平で、須恵器に近いものがある。

それでは、以上のような甲斐型模倣坏は、いつの段階にどのような過程で模倣されたものなのだろうか。これについて検討を加えてみる。まず暗文であるが、体部内面に加えて見込み部に暗文を有するのは、甲斐Ⅴ期・Ⅵ期を中心として一部甲斐Ⅶ期にも見られる特徴である。さらに体部と底部の境に施される暗文風の沈線は、甲斐Ⅵ期に盛行する技法である。体部外面下位の斜方向のヘラケズリは、甲斐Ⅵ期から見られるようになり、甲斐Ⅶ期以降に盛行する。ただし6に見られるような体部下端の小幅のヘラケズリは、甲斐Ⅵ期の特徴である。原則的に回転糸切りの後に底部外面を全面手持ちヘラケズリする時期は甲斐Ⅵ期であるが、この時期にはその上からさらにミガキを加えるものも見られる。甲斐Ⅶ期には底部回転糸切りの後、外周をヘラケズリするものが多くなる。このような調整技法から考えるに、本遺跡出土の甲斐型模倣坏は、6が古手の甲斐Ⅵ期の、他の4点が甲斐Ⅶ期の特徴を模倣したものと推定される。さらに法量を見ると、6だけが口径10.6cmとやや小振りではあるが、箱形の器形を有し、口径・底径比も61%と大きい。それに対して他の4点は、口径が11cm後半代から12cm前半代で、口径・底径比も54%に集中している。甲斐Ⅵ期の口径・底径比は60%~65%付近であり、甲斐Ⅶ期の口径・底径比が50~60%で底径6.5cmが標準であるから、法量についてもよく真似ているといえよう。ただし後者に関しては、同時期の須恵器坏も似たような傾向を示すので検討を要する。一方、底部の成形技法や、当該期の甲斐型坏に比べて器高が低く偏平な器形を呈する点などは、須恵器坏の影響が強く感じられるように見受けられる。従ってこれらの甲斐型模倣坏は、甲斐Ⅵ期（8世

紀第4四半期)から甲斐Ⅶ期(9世紀第1四半期)の時期に模倣され、さらに大胆な推測をすれば、須恵器坏製作工人ないしは須恵器坏製作経験者によって模倣されたものであると考えられよう。

## 2. 供伴する須恵器坏の様相

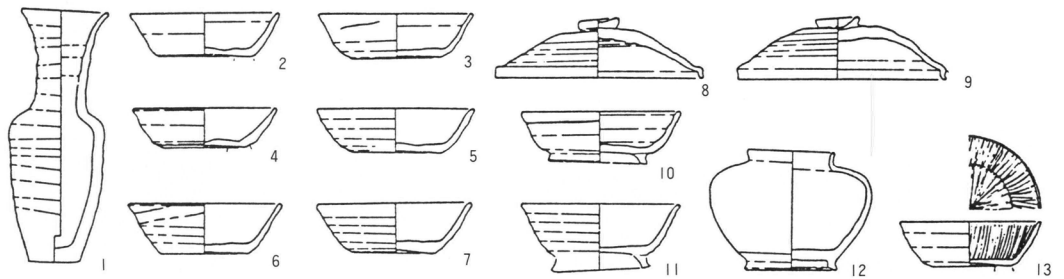
次に、これらの甲斐型模倣坏に供伴している須恵器坏を概観してみる。提示した須恵器坏は、甲斐型模倣坏と同一の住居址より出土したもので、ほぼ完形のもを抽出した。3号住居址からは、残存状況の良好な須恵器坏は得られなかった。8号住居址からは、4・5が出土している。4は口径12cm・底径6.5cmで口径・底径比が54%を示し、底部調整は全面回転ヘラケズリで、体部の器壁は薄く、口縁部は玉縁状を呈している。これに対して、5は口径12.5cm・底径7.2cmと4よりもやや大振りで口径・底径比が57%を示し、底部調整は回転糸切り痕を底部中央に残す外周回転ヘラケズリを施し、回転ヘラケズリが体部下端にまで及んでいる。15号住居址からは、8～10の3点を示した。8は口径13.1cm・底径6.6cmで口径・底径比が50%を示す。9は口径13.1cm・底径7.6cmで口径・底径比が58%を示す。8・9双方とも底部調整は回転糸切り無調整で、口径も13cmを越えるが、底径の差は切り離し位置の違いによるものであろうか。これに対して10は、口径12.8cm・底径6.5cmで口径・底径比が51%を示し、底部調整は回転糸切り痕を底部中央に残す外周回転ヘラケズリで、回転ヘラケズリが体部下端にまで及んでいる。また胎土に白色針状物質を含んでいるものは、これらのうち10のみである。

以上のように供伴する須恵器は、8号住居址で底部全面ヘラケズリのもものと外周ヘラケズリのもものが伴い、15号住居址では底部外周ヘラケズリのもものと糸切り無調整のもものが伴う。これを近隣の調査成果に照らしてみる。将監塚・古井戸遺跡では、同遺跡の編年の第8期で底部全面ヘラケズリのもものと外周ヘラケズリのもものが伴い、第9期で底部外周ヘラケズリのもものと糸切り無調整のもものが伴う。この前段階の第7期では底部全面ヘラケズリのもものみで構成される。また次の第10期には、末野窯からの供給だけとなり、法量も11～12cm代の小振りのものになるという。報告書によると、第8期は8世紀第4四半期に、第9期は8世紀末～9世紀第1四半期にそれぞれ比定されている(赤熊：1988)。また後述する岡部町白山遺跡では、57号住居址から本遺跡と同タイプの甲斐型模倣坏が出土しているが、これに伴う須恵器坏は末野窯の製品で(第3図2～7)、そのうち4点が底部周辺手持ちヘラケズリを、2点が底部の一部に手持ちヘラケズリを施すものであるという(酒井：1987)。さらにこの住居址は壺G(第3図1)を伴うことでも知られており、先の将監塚・古井戸遺跡第8期の年代的根拠となっている。これら近隣の集落出土資料と対比した須恵器坏の年代観も、甲斐型模倣坏の年代観と一致している。

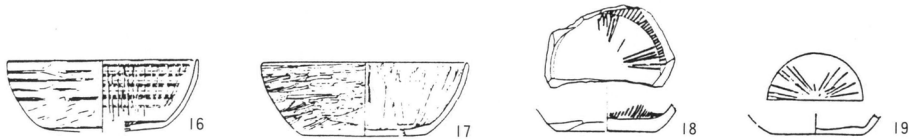
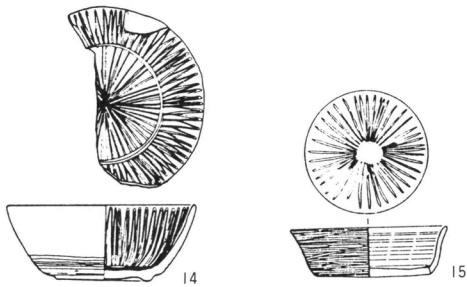
## 3. 武蔵国における甲斐型坏・甲斐型模倣坏

さて本遺跡周辺では、同様の甲斐型模倣坏を出土する遺跡はないのであろうか。そこで近隣遺跡での類例を探すとともに、武蔵国全域の様相について検討してみる。

第3図に挙げたものが、31を除き、武蔵国域で出土した甲斐型坏・甲斐型模倣坏である。そのうち13・14・15が本遺跡周辺での出土例である。13は岡部町白山遺跡(第4図2)57号住居址出土のもので、1～12に代表される多数の須恵器を伴っている。この坏は身浅で偏平な器形を呈し、底部外面の



- 1～13、岡部町白山遺跡57号住一括、  
 14、本庄市・見玉町古井戸・将監塚遺跡、  
 15、見玉町雷電下遺跡、16、富士見市谷津遺跡、  
 17・23・24・26・27、府中市武蔵国府関連遺跡、  
 18・21・22、日野市落川遺跡、25・29、日野市神  
 明上遺跡、19、横浜市峯遺跡群、20、国分寺市武  
 蔵国分寺関連遺跡、28、八王子市要石遺跡、  
 30、町田市小山田遺跡群、31、柏市高野台遺跡



第3図 武蔵国出土の甲斐型杯・甲斐型模倣杯

調整は回転糸切り痕を中央に残し外周を手持ちヘラケズリしている。本遺跡出土の甲斐型模倣杯と全く同類のものである。時期的にも将監塚・古井戸第8期（8世紀第4四半期）に相当し、本遺跡例に一致する。14は本庄市と見玉町にまたがり本遺跡に隣接する、将監塚・古井戸遺跡（第4図1）のH-155号住居址より出土した高台付杯である。橙褐色を呈する色調や暗文の調子から本来の甲斐型杯でよいと感じられるが、胎土に石英質の小石を多く含む点が気にかかる。この杯を出土した住居址は、

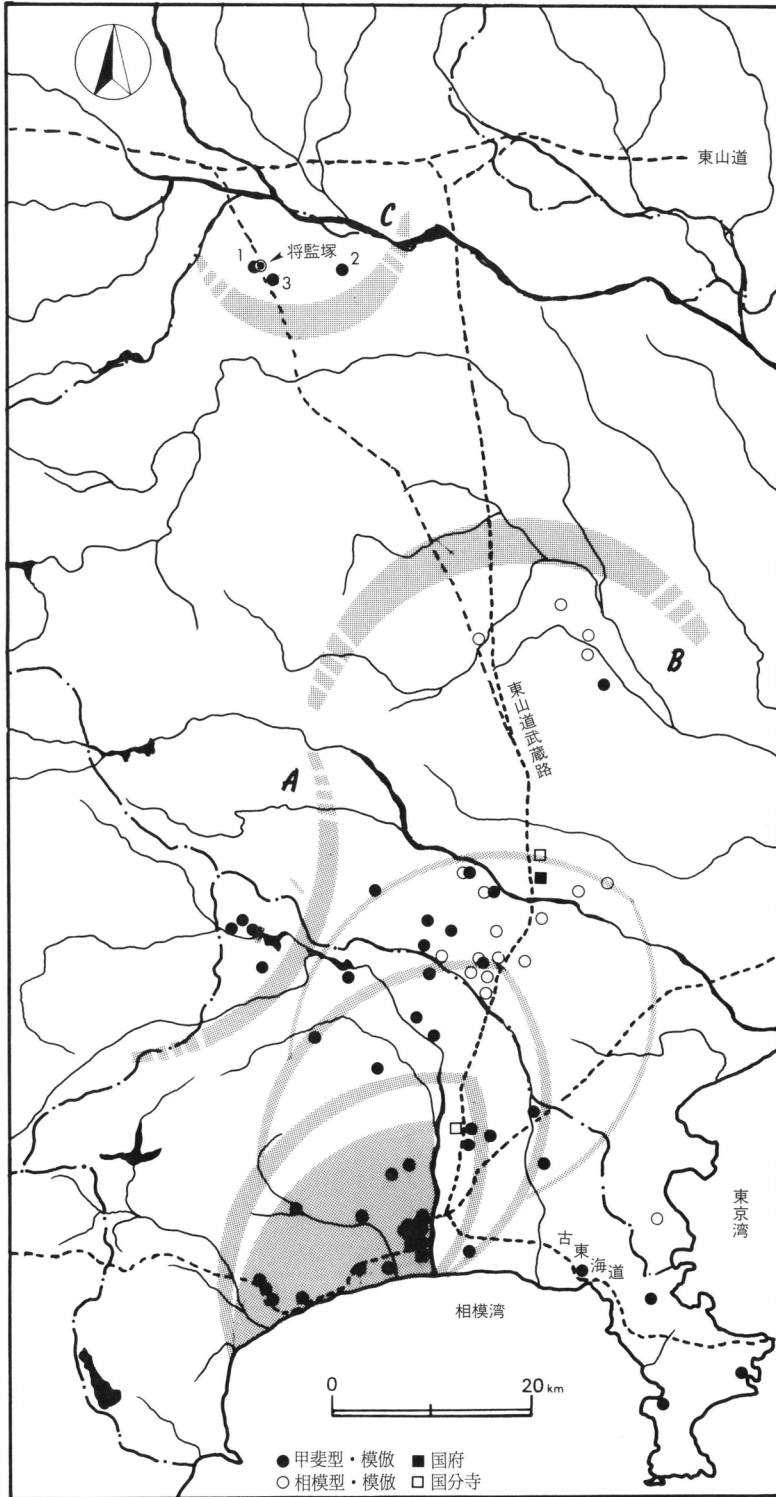
古井戸・将監塚第9期（8世紀末～9世紀第1四半期）に位置づけられている<sup>1)</sup>。15は児玉町雷電下遺跡B・C地点（第4図3）81号住居址より出土した坏である。これも扁平な形態を呈するが、体部外面をヨコミガキし、見込み部には放射状暗文を有するが体部内面には認められない。この特徴によってすでに甲斐型坏とは認められないが、見込み部に放射状暗文を施す手法が本地域に全く類例がないため、甲斐型坏からの影響も幾分か考えられ、参考程度に挙げておいた<sup>2)</sup>。このように本地域における甲斐型坏・甲斐型模倣坏の様相は、雷電下遺跡例を除く7例中6例までが同系統の模倣坏であり、その年代は8世紀第4四半期～9世紀第1四半期頃に位置付けられることが確認できた。それでは武蔵国域のうち中・南部の様相について概観しよう。この地域の様相については前稿において、武蔵国域における相模型土器の分布に関連して触れたことがあるので（田尾：1994）、それに基づいてのべる。武蔵国中・南部出土の甲斐型坏は第3図16～30に示した通りであるが、一見したところ模倣品は含まれておらず、全てオリジナルの甲斐型坏であるといえよう。時期的には16・17のような甲斐Ⅴ期にまでさかのぼるものもあれば、28のように甲斐Ⅸ期に位置付けられるものや、30のように甲斐Ⅹに位置付けられる高台付坏も見られる。このうち甲斐型坏が最も多く搬入される時期は、甲斐Ⅶ期からⅧ期にかけてである。従って武蔵国中・南部における甲斐型坏は、甲斐Ⅴ期（8世紀第3四半期）から搬入が始まり、Ⅶ～Ⅷ期（9世紀第1～第2四半期）に搬入のピークを迎え、Ⅸ期（9世紀中葉）から衰退してⅩ期（9世紀末）以降は見られなくなる。これは相模国における甲斐型坏搬入のあり方と同様で（田尾：1992）、甲斐型坏は相模国をステップとして搬入されたことを物語っている。これを傍証するものとして、武蔵中・南部における相模型土器の分布がある。相模型土器は相模国以外では武蔵中・南部に多く分布しており、その北限は仙波四丁目遺跡・弁天西遺跡・西河原遺跡など川越市内の諸遺跡<sup>3)</sup>である。川越市内の諸遺跡とは新河岸川を挟んで南に対峙する、富士見市谷津遺跡では甲斐型坏（第3図16）が出土しており、分布の北限も甲斐型坏と相模型土器はオーバーラップしているといえる。それ以北の地域では、本遺跡の所在する児玉郡・大里郡域まで甲斐型坏ないしは甲斐型模倣坏の出土が見られず、また相模型土器も分布しないため、明らかに土器の分布圏を異にしているといえよう（第4図）。

#### 4. 甲斐型坏・甲斐型模倣坏の分布とその解釈

これまで本遺跡の出土例を足がかりとして、甲斐型坏・甲斐型模倣坏の時期と分布について概観してきたが、地域的な広がりを土器流通の面から推察してみよう（第4図）。

まずオリジナルの甲斐型坏が多量に搬入される、南からの経路について見てみよう。はじめに武蔵国へ甲斐型坏が搬入されるステップとなった相模国であるが、その分布は相模川西岸地域に著しい。これは国府と港湾施設（小田原市国府津や平塚市の相模川河口付近の可能性が高い）が存在していたからであろうと推察され、国府が関与した、商品としての甲斐型坏を大量輸入した結果であろうと考えられる。輸入にあたっては、甲斐国より船を利用した河川・海路経由の搬入が予想される。これはルート上にありながら、駿河地域の製品の搬入がごくわずかしか認められないことから、搬入経路・選択的搬入が読み取れよう。この海路での土器の大量搬入は、甲斐型坏からその地位を取って代わった遠江産灰釉陶器に引き継がれる。斉藤孝正氏は、遠江産の灰釉陶器の一大消費地は相模国であり、





第4図 甲斐型冢の広がり

海路で相模湾に陸揚げされたものであろうとしている(斉藤：1993)。このように相模国に搬入された甲斐型坏は、その一部が、相模型土器が武蔵国域に搬入されるルートに乗って持ち込まれたものであると考える。この背景には、福田健司氏のいう武蔵国分寺の創建と南多摩寮の操業に起因する土師器製作工人の不足、そこからくる土師器の供給不足という見解(福田：1978)を評価したい。たしかに8世紀後半を中心に南武蔵の地域では、土師器坏の構成が南武蔵型に加えて、落合型・北武蔵型・相模型などが混在する複雑な様相を呈する(山口：1985)。すなわち、南武蔵地域の土師器の不足を補う一端として相模型土器が搬入され、その流れに乗って相模国に搬入された甲斐坏土器の一部が武蔵国域までもたらされたのであろう。またこの流通経路として、東海道と武蔵国府を結ぶ官道と、東山道と武蔵国府を結ぶ東山道武蔵路の果たした役割が大きかったものと考えられる。そしてこの経路を北上した限界、つまり東山道武蔵路を介した流通圏の北限が川越市周辺の入間郡域である(第4図B)と現在のところは推測している。

ちなみに第4図Aの範囲にある遺跡は、神奈川県藤野町内に所在する平安時代集落である。これらの集落は10世紀頃になってはじめて出現し、出土土器の器種構成も相模型が少なく、煮沸形態を甲斐型が占めるなど、特殊な構成を示す。おそらくこの地域は甲斐・相模の国境地帯にあたり、集落が出現する10世紀頃は甲斐国(甲斐国相模郷?)に属したのであろう。

一方、本遺跡を中心とする北武蔵の甲斐型坏・甲斐型模倣坏についてはどうであろうか。先にも述べたように、本地域より出土する甲斐型坏・甲斐型模倣坏は、雷電下遺跡例を除くと、将監塚・古井戸遺跡例の1点がオリジナルの甲斐型(高台付)坏であるが、他の2遺跡6例は法量・技法も極めて類似したもので、同一の地域で生産されたことは間違いない。このように甲斐型を模倣した坏は、最も多く搬入される相模国内でも2例しか認められず、それは相模型坏と同様の胎土で忠実に模倣されたもので、本地域のものとは全く様相を異にする。また南北両者の分布に空白地帯があるため、本地域の甲斐型坏・甲斐型模倣坏は、南からの搬入であったり、その影響のもとに成立したものではないといえる。この南北分断については、鈴木徳雄氏が興味深い見解を述べているので、多少長くなるがその一部引用させていただく(鈴木：1984)。氏は、「武蔵国“中部”の地域では坏7類以前迄は北武蔵系坏が主体をなしているが、それ以降は、断続的にかつ客体的に出土するにとどまり、この器種の主体が須恵器によって占められるようになる。…(中略)…当地域が先にみた北武蔵系坏の系統連続圏をはずれ、すでに北武蔵系坏の存在が系統連続圏外の分布として捉えられるものに変化したことを示している。…(中略)…(北武蔵系坏は)“北部”地域から“搬入された坏”として捉えられる可能性を示している。またこの地域の南半はときとして「南武蔵型坏」が出土することも注目しておきたい。」と述べ、武蔵国北部では「南武蔵型坏」は認められず異系統の土師器坏も少ないことを指摘している。さらに、これらを含む土器様相の差異から、武蔵国南・中・北部のそれぞれが、ある種の“在地交易圏”を形成していたのではないかと述べている。遺物から見たこのような分断の時期は、8世紀の後半以降のことであるので、どうしても宝亀2(771)年に起こった、武蔵国の東山道から東海道への所属替えと、これに伴う東山道武蔵路の公的な廃止を念頭に置かなければならないだろう。これらのことから、本地域で出土する甲斐型坏・甲斐型模倣坏は、武蔵国内でありながら武蔵国府との交流が乏しい地域にあり、甲斐型坏は東山道経由で、甲斐型模倣坏は東山道沿いの地域で製造されたも

のが搬入されたものであると予想したい。甲斐型模倣坏の故地は、今のところ上野国域に求めておき、類例の発見に期待したい。

本稿を草するに当たって、担当である長谷川勇・太田博之の両氏ならびに児玉町教育委員会 鈴木徳雄・徳山寿樹の両氏にはたいへんお世話になりました。末筆となりましたが、記して感謝いたします。

#### 註

- 1) 岡部町白山遺跡および将監塚・古井戸遺跡の資料は、埼玉県埋蔵文化財調査事業団 赤熊浩一・大屋道則の両氏にお世話になって実見した。
- 2) 児玉町教育委員会 鈴木徳雄氏にご教示を受け、資料の提供を賜った。ただし都合により直接は実見していない。
- 3) これらの資料は、田中 信氏ら川越市教育委員会諸氏の御高配により、前稿にて発表した(田尾：1994)。また東京家政大学 岩崎卓也先生より、相模型坏が川越一中校庭より出土しているのご教示を得た。

#### 引用・参考文献

- 赤熊浩一 1988 「Ⅳ. 調査成果のまとめ 1. 奈良・平安時代の土器編年」『将監塚・古井戸 歴史時代編Ⅱ(第2分冊)』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 井上尚明 1993 「北武蔵の古代交通路について」『研究紀要』第10号 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 恋河内昭彦他 1990 『雷電下遺跡—B・C地点—(図版編)』 児玉町教育委員会
- 斉藤孝正 1993 「神奈川県下出土の灰釉陶器・緑釉陶器」『三浦古文化』第53号 三浦古文化研究会
- 酒井清治 1987 「第3章 結語 第2節 埼玉県の須恵器の変遷について」『埼玉の古代窯業調査報告書』 埼玉県立歴史資料館
- 1993 「武蔵国内の東山道について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第50集 国立歴史民俗博物館
- 鈴木徳雄 1984 「いわゆる北武蔵系土師器坏の動態」『土曜考古』第9号 土曜考古研究会
- 田尾誠敏 1992 「相模地方の甲斐型土器覚書」『山梨県考古学協会誌』第5号 山梨県考古学協会
- 1994 「越境する相模型土器」『東海大学校地内遺跡調査団報告4』 東海大学校地内遺跡調査団
- 中村倉司他 1989 『白山遺跡』 埼玉県教育委員会
- 福田健司 1978 「南武蔵における奈良時代の土器編年とその史的背景」『考古学雑誌』64—3 日本考古学会
- 山口辰一 1985 「武蔵国府と奈良時代の土器様相」『東京考古』3 東京考古談話会

# 写 真 图 版





調査区全景（東側北半）



調査区全景（東側南半）



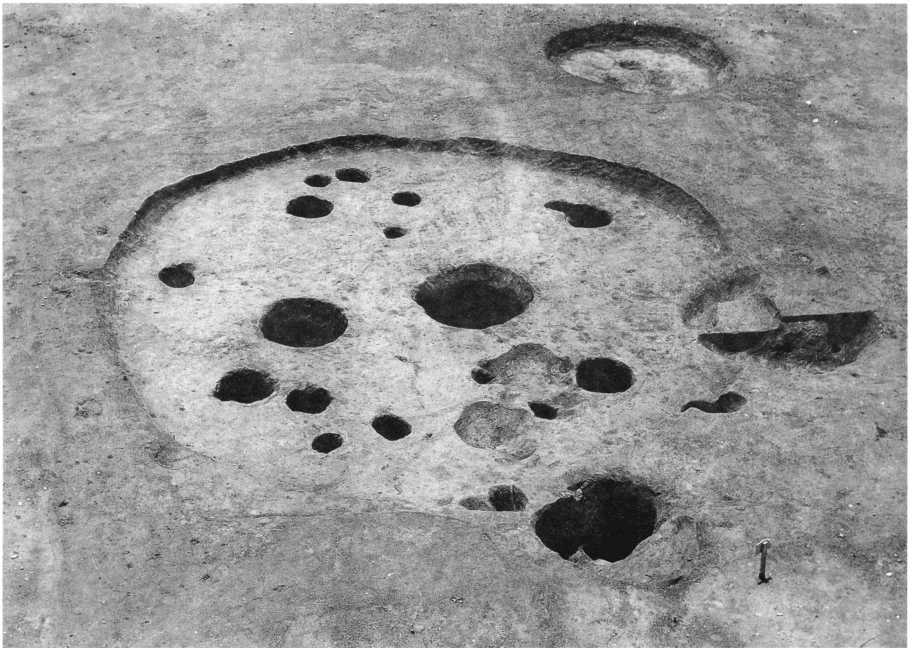
1号住居址



1号住居址遺物出土状況



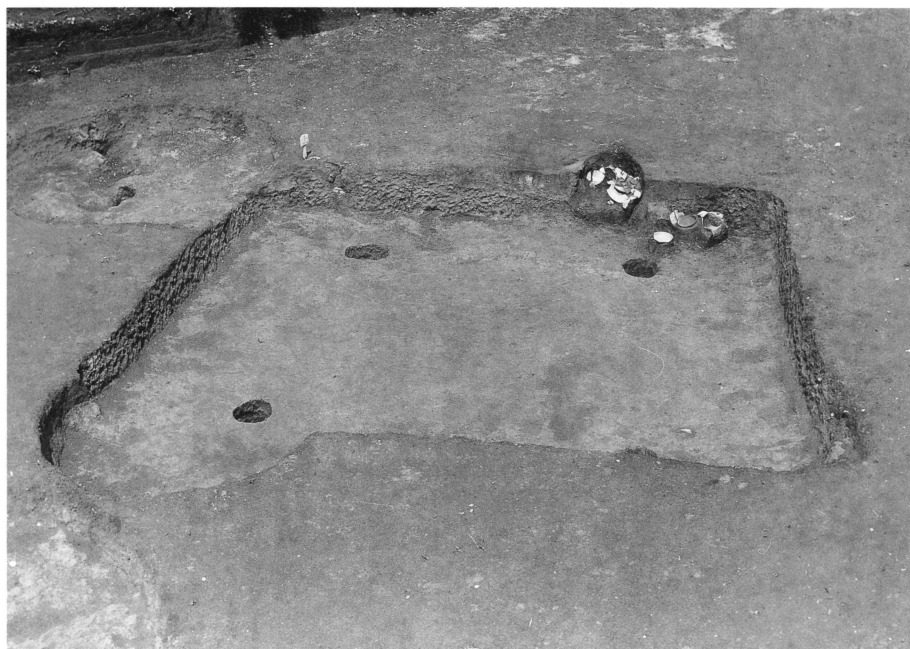
1号住居址遺物出土状况



2号住居址



图版 4



3号住居址



3号住居址遺物出土狀況



4号住居址



6号住居址遺物出土狀況



7号住居址



7 (左)・8・9・10号 (手前) 住居址



8・9号(手前)住居址



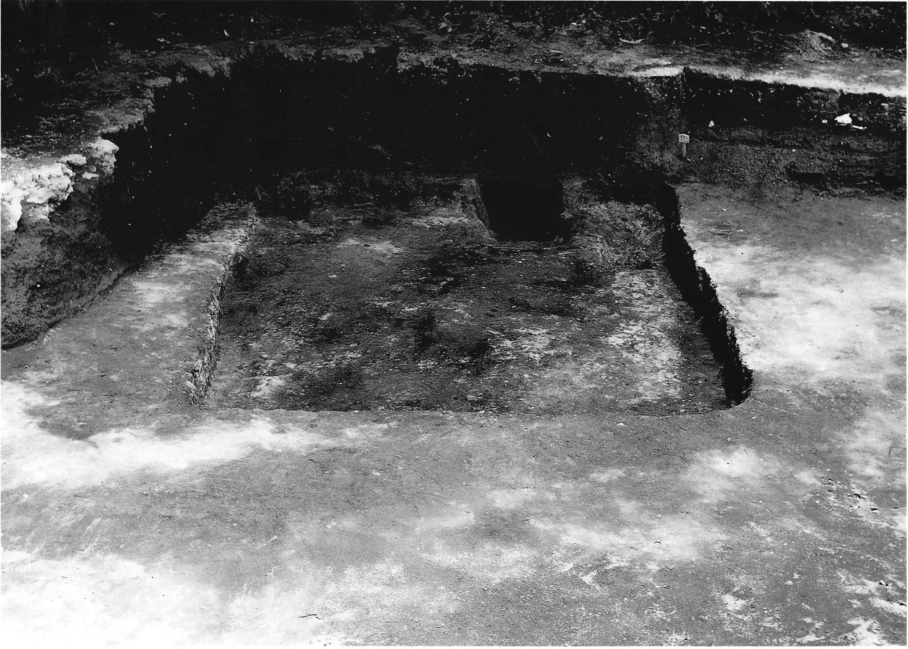
8・9号(手前)住居址遺物出土状況



12号住居址（カマド付近）



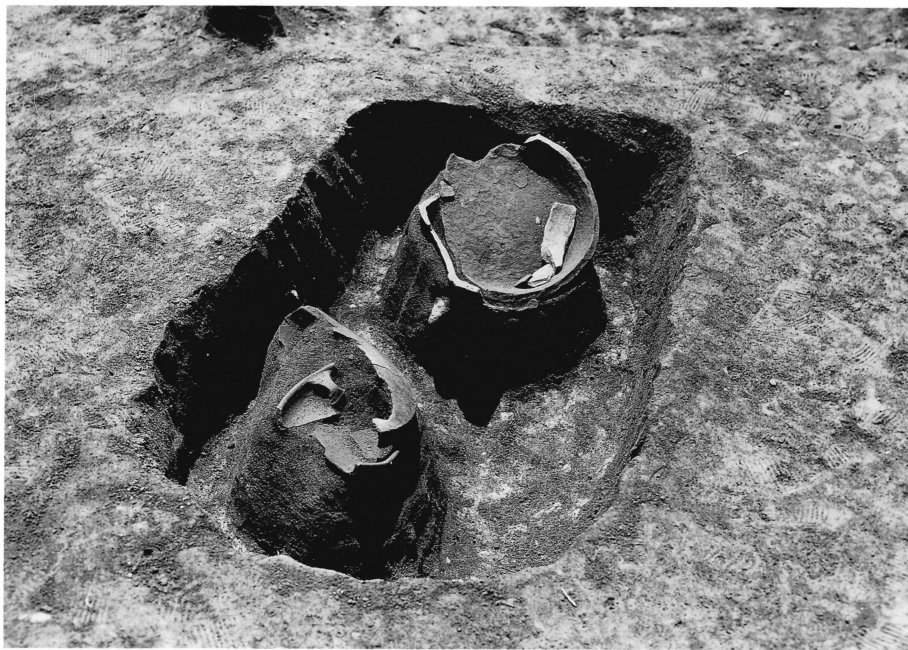
14号住居址



15号住居址



大溝断面



5号址遺物出土状況



近代溝（2号）

## 将監塚遺跡B地点発掘調査報告書

---

---

平成6年3月20日 印刷

平成6年3月31日 発行

発行 本庄市遺跡調査会  
埼玉県本庄市本庄3-5-3

印刷 朝日印刷工業株式会社  
群馬県前橋市元総社町67

---

---







将蓝塚遗址B地点全测图

